

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Private Exploration in the United States in the 1930s : Analyzing the Toshio Asaeda Expeditions Itinerary and Routes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹羽, 典生 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009516">https://doi.org/10.15021/00009516</a>

## 1930年代のアメリカにおける私的探検の考察 ——朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から——

丹羽典生\*

Private Exploration in the United States in the 1930s:  
Analyzing the Toshio Asaeda Expeditions Itinerary and Routes

Norio Niwa

人類学が学問として制度的に確立する前の移行期にはさまざまな探検という調査プロジェクトが存在していた。本稿では、そうしたなかでも日本人博物学者朝枝利男の参加したアメリカの探検隊に注目したい。朝枝利男は、多様な経歴を経た人物であるが、1923年の渡米後、アメリカで活躍した博物学者・学芸員とさしあたりまとめられる。彼は、剥製から水彩画と写真撮影までの多様な博物学的技術を身に着けていたことから、1930年代に企画された半ば私的な調査隊に数多く参加していた。その結果、数多くの博物学的な写真と水彩画を残している。しかしそれらは世界各地の博物館に散在して資料としての整理の段階から進められていないままにおかれている。そこで本稿では、以下3点を目的としたい。まず、これまで基礎的な資料整備の水準で取り扱われていなかった朝枝利男コレクションの資料が作られた背景を精査することで、資料としての特徴を明確化すること。その際、あわせていまではほぼ忘れられた朝枝利男の活動を傍系的に復元すること。そして最後に、本稿からみえてくるアメリカで行われた史的探検に関わる資料を読み解くに際しての留意点を指摘することである。

Research practices of various kinds were established as an academic discipline before anthropology. This article focuses on the American expedition team with participation by Japanese naturalist Toshio Asaeda. Toshio Asaeda was a person with various backgrounds: after migrating to the United States in 1923, he was employed mainly as a photographer, artist, curator or taxider-

---

\*国立民族学博物館

**Key Words** : expedition, natural history, Zane Grey, Templeton Crocker, Toshio Asaeda

**キーワード** : 探検, 博物学, ゼーン・グレイ, テンプルトン・クロッカー, 朝枝利男

mist there. He became a member of partly private-funded expeditions in the 1930s because he had many naturalistic skills from taxidermy to watercolor painting and photography. In fact, large number of Asaeda's naturalistic photographs and watercolors remain in museums around the world. Nevertheless, they have not been fully studied to date. Therefore, the objective of this paper is to clarify the following three points herein. First, the characteristics of the materials are clarified by examining how they were collected and during what expedition. Second, along with the first point, Toshio Asaeda's activities, which have been nearly forgotten, must be restored. Furthermore, some characteristics of private exploration in the United States in 1930s are clarified.

1 はじめに	3.4 テンプルトン・クロッカーによるメキシコ・バジャへの釣り旅行 (1935年11月5日)
2 出発点としてのアメリカの探検隊への参加	3.5 ニューヨーク動物協会のテンブルトン・クロッカー探検 (1936年3月16日から5月28日)
2.1 ゼーン・グレイとの出会い	3.6 サモアとハワイ諸島へのアメリカ自然史博物館のテンブルトン・クロッカー探検 (1936年8月18日から1937年1月17日)
2.2 ゼーン・グレイとの旅行 (1930年12月から1931年7月)	3.7 ニューヨーク動物協会の東太平洋探検 (1937年11月1日から1938年5月5日)
3 転換点としてのチャールズ・テンブルトン・クロッカーとの出会い	4 私的探検の系譜とハイブリッド
3.1 カリフォルニア科学アカデミーのテンブルトン・クロッカー探検 (1932年3月10日から9月1日)	4.1 アメリカの私的探検のなかのグレイ及びクロッカー探検
3.2 ソロモン諸島へのテンブルトン・クロッカー探検 (1933年3月2日から9月15日)	4.2 探検隊というハイブリッド
3.3 東ポリネシアへのアメリカ自然史博物館のテンブルトン・クロッカー探検 (1934年9月15日から1935年4月16日)	5 さいごに

## 1 はじめに

本稿では、人類学的営為が「探検」と形容されていた時代に産出された資料を読み解く。学説史において、人類学・民族学の草創期が博物学的研究と地続きであったことは、広く指摘されている。マリノフスキーによって対象地域への長期滞在に基づくフィールドワークという調査方法が科学的手順として定式化されるまでは、それとは別の学問的営為の在り方があったわけである。別の言い方をすれば、大学なり研究機関によって学位を修めた者によって組織された調査が、あたりまえの光景となるのはそうした研究環境が変化してからである。転換を経る前には、「探検」ということばのもと、規模・目的・射程がさまざまで国から個人までさまざまな主体によって行われた調査的営為が併存していた。人類学が制度上確立していく歴史とは、こうした方法やそれに基づき収集された資料が、学問の研究対象として周辺化されていく過程でもあった(Thomas 1996: 22-24)。

ただしこうした整理の仕方は、ヨーロッパにおける学史の展開に準拠したものである。たとえば、大航海時代の日本は鎖国しており、明治時代に帝国主義的拡張にともない探検に乗り出している。また先の経路とは逆に、探検が戦前から戦中にかけて盛んとなったのみならず、戦後においても学術的にも重要な各種の探検隊が派遣されている(田中 2011: 576-577)。

本稿では、そうした人類学が学問として制度的に確立する前の移行期に行われた調査プロジェクトを扱う。なかでも日本人博物学者朝枝利男の参加したアメリカにおける探検隊に注目したい。朝枝は、ひとことで経歴をまとめにくい人物であるが、1923年の渡米後、アメリカで活躍した博物学者とさしあたりいうことができる。本稿で取り扱うのは、剥製から水彩画までの多才な博物学的技術を身に着けていた彼がカメラマン兼芸術家として参加した1930年代の一連の探検隊である。そしてその分析を通じて、本稿では以下3点を目的としたい。まず、国立民族学博物館所蔵及びカリフォルニア科学アカデミー所蔵の朝枝利男関連コレクションの資料の精査を通じて、これまで基礎的な資料整備の水準で不十分であった資料の特徴を明確化すること。その際、いまでは忘れられた朝枝の活躍に傍系的ながら焦点を当てること<sup>1)</sup>。そして最後に、朝枝利男関連コレクションを生み出した調査プロジェクトと同様の系譜に属する、アメリカで行われた私的探検に関わ

る資料を読み解く際に必要となる視点を示唆したい。

朝枝利男関連資料のうちクロッカー探検隊と関わる分は、アメリカのカリフォルニア科学アカデミー、アメリカ自然史博物館、ビショップ博物館、イギリスのケンブリッジ人類学考古学博物館、フランスのケ・ブランリー博物館など世界各地に残され、当時の現地社会の状況から調査の様子までうかがい知れる貴重な情報源となっている。しかしどういった目的をもって、いつ、どのような経路で探検を行ったのかという基本的な情報が整理されていないこともあり、十分に活用するのがそもそも難しい状態のままに留め置かれている。

朝枝の参加した探検隊は、いずれもアメリカで組織されたものである。大きくふたつに分けられ、ひとつはベストセラー作家のゼーン・グレイに同伴した太平洋へのゲームフィッシング（釣果の重さを競う釣りの一種）の旅である。もうひとつは、カリフォルニアの富豪テンブルトン・クロッカーが私財をなげうって建造した船ザカ号（Zaca）によって行われた太平洋（南北アメリカ大陸の太平洋側を含む）における探検である。いずれの探検も、その探検隊の正式名称から目的や経路まで学術資料としては基礎となるような点の多くが十分に整備されていない。とくにクロッカーの探検隊は、クロッカーの提供したザカ号に乗船したアメリカの各地の博物館や研究所のスタッフによって調査が行われたため、各種標本から写真・映像資料まで大量の成果を生み出し、それらは世界各地の博物館に収蔵されているにもかかわらずである。

ゼーン・グレイの探検に関する研究は、筆者がみたかぎり皆無である。彼のゲームフィッシングへの耽溺とタヒチでの滞在については伝記的研究のなかで触れられる（May 2000; Pauly 2007）。しかし、それと博物学的な営為との関連性について分析が深められたことはない。彼は西部劇の作家としての認知がもっぱらであり、それ以外については十分に光が当てられているとは言い難いのである。たとえば彼の西部劇の作品は何度も再刊されていることに比べて、晩年の彼のタヒチ滞りを題材にした作品集となると、グレイ晩年の傑作という評価があるにもかかわらず、没後 38 年の 1977 年になってようやく刊行されたほどである（May 2000: 199）。

クロッカー探検隊の資料を扱う数少ない論考からも、基礎的情報の整備の欠落が伺える。同じ点は、ケンブリッジ大学考古学人類学博物館に所蔵されているク

ロッカー探検隊関連資料を調査したルーシー・カローも指摘している。彼女によると、クロッカー探検隊の収集した民族標本はカタログにされているとはいえ十分に文書化されているとは程遠い状態にある。また彼女は写真資料と収集過程の関係性が不明確であることを指摘し、同じ調査の結果であるにもかかわらず写真と標本資料が相互に参照できないという問題点を抉出している (Carreau 2018: 139)。ただし彼女の分析は、その欠点を補うための探検隊のデータの基本的整序にまで及んでいない。

同じコレクションに含まれたヴァヌアツのマラクラの写真資料を精査したハイディ・ガイスマーは、おそらくケンブリッジ博物館のデータベースに記載されている情報に依拠したためと思われるが、基本的な間違いを犯している。写真の撮影者を朝枝利男として分析しているが (Geismar 2006: 547–550)、以下本稿で記述するようにその可能性はない。彼の分析した写真が撮影された時に、朝枝はゼーン・グレイとの旅行に出発していたからである。

また、ワーウィック・アンダーソンは1934年から1935年にかけてのクロッカー探検隊の資料を中心に人種と混血の問題を科学史的な観点から検討している。主たる対象であるユダヤ人ハリー・シャピロの形質人類学的研究の興味深い側面を明らかにしている。混血に学問的な関心を抱いていたシャピロの人種概念への反発を、太平洋社会の混血とのあいだに関係を切り結んだ経験から読み解いている点には説得力がある (Anderson 2012)。ただし彼が調査中に築いたのは調査対象者との関係だけではない。船を移動手段としていた当時の調査形態は、調査メンバーや船員とのあいだに長期にわたる狭い生活空間の共有を強いるものであった。事実彼は、同じ船の中で2名のサモア人と日本人である朝枝とも過ごしている。このように当時の調査の形態を念頭に置いたとき、また別の関係性が彼の人種解釈に影響を与えた可能性を示唆したくなる。

結論を先取りすると、先行研究に見られるようなデータの齟齬や、解釈の問題点が生じる背景には、実際に民族標本や写真を収集した探検隊に関する基礎的なデータの整理ができていないからである。本稿では、公刊された報告書・論文など関連する資料を比較検討することで、基本的な事実関係を記述・分析する。ただしそうした資料から復元できなかった部分は、国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションのアルバムに記載された情報をもとに分析を試みたい。こうした記

述・分析の積み重ねを通じて、当時の研究調査の特徴を浮かび上がらせることが、本稿の目的である。その結果、いまでは顧みられることも少ない探検に基づく資料が今後効率的に活用される道を開くとともに、それぞれの探検に果たした朝枝利男の小さくない役割について素描できたらと思う。

## 2 出発点としてのアメリカの探検隊への参加

### 2.1 ゼーン・グレイとの出会い

朝枝は東京で裕福な家族のもとに生まれ、東京高等師範学校で学位を得た。その後 1923 年に学問の研鑽を積むためアメリカへと移住したものの、関東大震災の影響もあり資産を失なった。その結果、1920 年代のアメリカという異国の地で生活の足場を固めるために苦闘することになる。彼にとって探検という営為に加わる契機は、アメリカの富豪や探検家の旅行に、写真家として雇われたことにあった。実際のところ 1930 年代の朝枝は、旅行につぐ旅行に明け暮れていたといえよう。そうした旅に生きる人生の一時期は、小説家ゼーン・グレイに同伴した旅行からはじまった。

### 2.2 ゼーン・グレイとの旅行（1930 年 12 月から 1931 年 7 月）

朝枝が太平洋への旅に乗り出したのは、1930 年も年の瀬を迎えた頃である。1920 年代のアメリカにおける大ベストセラー作家であるゼーン・グレイ (Zane Grey) とともにフランス領ポリネシアのタヒチを中心とする南太平洋へと船出したのだ。後年、朝枝は新聞記者に、「友人であるゼーン・グレイに写真家兼記録係として招待された」と語ったという (Takahashi 1943: 2)。しかし実際のところ 2 人がどこで知りあったのか、またどこまで深い関係にあったのかなど、はっきりしたことはわからない。

ゼーン・グレイは、日本ではそれほど知名度がないかもしれないが、1915 年から 1924 年の 10 年間に刊行した 9 冊の新刊がすべてベストセラーリスト入りするほどの売れっ子で、西部劇というジャンル自体の興隆にも大きな貢献をしたとして文学史上に記録される人物である (Pauly 2007: 1-2)。西部劇以外にも趣味とし

ていたゲームフィッシングと呼ばれる大型魚の釣りの経験に基づく作品も生み出している。

朝枝が同伴したのは、この釣りの旅であった。グレイは、後に次のように回想している。「この旅を陸海に及ぶ私の人生におけるあらゆる冒険のクライマックスとしたい」(Pauly 2007: 290)と。実際当初は、タヒチを手始めに、パプアニューギニアのポートモレスビー、オーストラリアのグレートバリアリーフからアラフラ海を通過してインド洋のマガダスカル島に向かい、大西洋に入って世界一周を続けるという壮大な計画であった (May 2000: 203; Kant 2008: 293–294)。

ところが他ならぬこの旅行に関しては、断片的な言及こそみつかるとは、詳細な記述については公刊された書物のなかに見つからない。ゼーン・グレイは没後も次々に書籍が刊行されるような人気作家でありその著作は膨大であるため、筆者が見落としている可能性はある。またゼーン・グレイ関連の博物館・資料館に収蔵されている可能性もある。しかし執筆時点で、それらの所在を確認できていない<sup>2)</sup>。

その意味では、朝枝利男コレクションに残された資料は貴重である。朝枝の日記とアルバムから、彼らの大まかな旅程を再構成することができるからである。旅行の期間は、国立民族学博物館の朝枝利男コレクションに所蔵される朝枝自身が作成したアルバム<sup>3)</sup>によると、1930年12月24日にサンフランシスコを出港して、1931年7月13日にロサンゼルスに帰港している。前半はユニオン蒸気船会社 (Union Steamship Co.) のマノワイ (Manowai) 号でタヒチまで行き、後半の3月5日からはゼーン・グレイの所有するフィッシャーマンII号で帰国まで移動した。訪問した国は、フランス領ポリネシアを中心にトンガ、フィジー、ニウエであるという。朝枝が航路の一部を記録しているので、それに基づいて作成した地図を本稿の末尾に載せる (地図1)。併せて彼の日記をもとにして旅程の詳細も掲載する (表1)。

朝枝のアルバムによると、同乗者は、ゼーン・グレイ本人のほか、ミッチェル船長とその妻と娘、グレイの秘書であるキャンベルであった。ミッチェル船長とは、グレイのもとで7年間船長を務めたロウリー・ミッチェル (Laurie D. Mitchell) であろう (Pauly 2007: 9)<sup>4)</sup>。彼はオックスフォード大学で学位を修めたカナダ人で、グレイとはニューヨークで1923年に知り合って以来の友人で会った。応召前



表1 ゼーン・グレイとの旅行の詳細旅程<sup>5)</sup>

年	月 日	場 所
1930 年	12 月 24 日	[アメリカ] サンフランシスコ
1931 年	1 月 3 日	[フランス領ポリネシア] ソサエティ諸島タヒチ島バペーテ
	4 月 3 日	[フランス領ポリネシア] リーワード諸島ライアテア島
	4 月 4 日	[フランス領ポリネシア] ソサエティ諸島モーレア島
	4 月 9 日	[フランス領ポリネシア] リーワード諸島タハア島
	4 月 15 日	[フランス領ポリネシア] ソサエティ諸島ボラボラ島
	4 月 23 日	[フランス領ポリネシア] リーワード諸島ライアテア島
	4 月 24 日	[フランス領ポリネシア] リーワード諸島タハア島
	4 月 30 日	[トンガ] ヴァヴァウ島 (5 月 8 日まで)
	5 月 10 日	[フィジー] ヴィティ・レヴ島スヴァ
	5 月 20 日	[フィジー] ラウ諸島ワイラギララ島 (5 月 25 日まで)
	5 月 27 日	[トンガ] ヴァヴァウ島 (5 月 28 日まで)
	5 月 29 日	[トンガ] ハアパイ諸島
	5 月 30 日	[トンガ] ノムカ島
	6 月 2 日	[トンガ] ヴァヴァウ島 (6 月 4 日まで)
	6 月 5 日	[ニウエ] ニウエ島 (6 月 10 日まで)
	6 月 17 日	[フランス領ポリネシア] ソサエティ諸島タヒチ島バペーテ
	6 月 24 日	[フランス領ポリネシア] ツアモツ諸島 (6 月 26 日まで)
	6 月 29 日	[フランス領ポリネシア] マルケサス諸島スクヒヴァ島 (6 月 30 日まで)
	7 月 13 日	[アメリカ] ロスアンゼルス

ノヴァ・スコティア (Nova Scotia) で漁師相手のガイドを経験しており、長年同地でのマグロ釣りを夢見ていたグレイにとっては、うってつけの相手であった (Pauly 2007: 227)。キャンベルは、この旅からグレイの秘書として雇われたベレナイス・キャンベル (Berenice Campbell) である。グレイの秘書のつねとして若い魅力的な女性であったという。当時グレイは多額の借金を抱えていたため、会計計算ができる彼女の能力はグレイの妻にも魅力的に映った。彼女が特に選ばれたもうひとつの理由である (Pauly 2007: 288)。朝枝はこの一行に「科学者兼カメラマン」として参加している (San Pedro News Pilot 1931: 2)。彼以外の研究スタッフは同行していなかったようだ。

朝枝のアルバムには、他の資料と若干齟齬する個所もある。たとえば地図 1 には記載されておらず、また朝枝も記録していないが、タヒチへの往路でハワイに立ち寄っていることが別の研究では言及されている (May 2000: 204)。ただし同

書ではアメリカからフィッシャーマンⅡ号で航海したと記述されているなど (May 2000: 203), 誤記されている可能性がある。また朝枝のアルバムには上述の4人が船上でそろって撮影された写真がある<sup>6)</sup>。1931年2月28日に 그레이の娘が新婚旅行としてフィッシャーマンⅡ号の船旅に中途から参加すべくタヒチに到着している (Kant 2008: 303)。その旅行の情報と入れ混じっているのであろうか。一方で、比較的最近刊行された 그레이の伝記によると、ミッチェル船長はタヒチにおける 그레이のキャンプ地に先に到着していたことになっている (May 2000: 204; Pauly 2007: 290)。彼はタヒチのパペーテあたりで下船して、別に行動したのだろうか。このあたりの行き来に関しては、なお精査する必要がある。

ところで朝枝と 그레이との旅をこのように整理すると、人気作家の趣味に付き合っただけという印象を与えてしまうかもしれない。注意を要するのは、当時のゼーン・ 그레이の釣りは、広い意味で博物学的営為につらなる可能性があった点である。たとえば、彼の釣りへの関心は海洋学に連なるものとして博物学者から捉えられている (Beebe 1926: vii-viii)。実際に、アメリカ自然史博物館の定期刊行物『ナチュラル・ヒストリー』に、釣りの体験と成果に関する原稿を 그레이は2本寄稿している (Grey 1928; 1932)。彼の釣りあげた大型魚をもとにした標本は1926年同館に寄贈されており (La Monte 1928: 93), 1928年には展示が開かれ (Pauly 2007: 271), 1930年にも常設展示場に置かれていたことが確認できる<sup>7)</sup>。エンターテイメント作家と朝枝という接点がわかりにくくなるが、このようなひろい博物学の研究ネットワークにおいてみると、両者の距離はさほど遠くない。

実際にこの旅においても、太平洋の島々や魚類についての写真が1,000枚以上撮影され、数十件に及ぶビン詰めにした魚類の標本が採集されていた。これらは、博物館や科学研究の機関に寄贈される予定であったという (San Pedro News Pilot 1931: 2)。ただし博物学的な資料収集について、これ以上のことは確認できていない。

なお意気軒昂ではじめられた旅であったが、後に 그레이は「この大いなる船旅は失敗だった」 (Pauly 2007: 294) と回顧している。大恐慌以降の経済状況の悪化、フィッシャーマンⅡ号の整備にかかった多額の債務 (本土にいた妻は何度も 그레이に帰国を促していた)、タヒチ滞在中のミッチェル船長や秘書キャンベルとの人間関係の悪化など、問題には事欠かなかったからだ。実際、 그레이はタヒチでの

滞在を最後に切り上げ、一旦帰国している。

### 3 転換点としてのチャールズ・テンプレトン・クロッカーとの出会い

朝枝が生涯のなかで数多くの探検に関わるようになったのは、チャールズ・テンプレトン・クロッカー (Charles Templeton Crocker) との出会いがあったからにちがいない。1884年に生まれたクロッカーは、もともと劇作家として名をなした人物であった。1926年には、『幸せの地 (The Land of Happiness)』を改作したオペラ『フェイ・エン・ファ (Fay-Yen-Fah)』によってフランスのレジオンドヌール勲章を手に入れている。その後、自前の船ザカ号を駆使して、生涯にわたって27,152マイルを走破して、50の港を訪れたという (Bustos 2009)。

以下に述べる探検に先立って、クロッカーは世界をめぐる個人的旅に出ている。1930年の6月10日から1931年5月27日にかけて、サンフランシスコを出港した後、フランス領ポリネシア、クック諸島、アメリカ領サモア、パプアニューギニア、インドネシア、スリランカ、イエメンのアデン、サウジアラビア、エジプト、マルタ共和国、フランスのカヌヌ、スペイン領カナリア諸島のテネリフェ島、プエルトリコ、パナマ、ガテマラ、メキシコのマンサニヨとエンセナダを通過するものだった (Davis n.d.)<sup>8)</sup>。先に個人的旅と記したように、研究スタッフは乗船していなかった模様である (Crocker 1933a: 3-5)<sup>9)</sup>。この旅をもとに、1933年には、『ザカ号の航海 (The Cruise of the Zaca)』という著作を刊行している (Crocker 1933a)。彼の手によって刊行された唯一の旅行記である。

朝枝は1932年から1938年まで、クロッカー探検隊の写真家兼画家であった (Bustos 2009)。彼がクロッカー探検隊に参加したのは、当時スタンフォード大学の総長 (president) で、魚類学者でもあったデイビット・スター・ジョーダン (David Starr Jordan) とカリフォルニア科学アカデミーのバートン・ウォーレン・エヴァーマン (Barton Warren Evermann) からの推薦があったからだという (Takahashi 1943: 2)。後者は1932年のカリフォルニア科学アカデミーのテンプレトン・クロッカー探検が実現するにあたり調整をした人物でもあり、その推薦は決定的な影響をもったと思われる (Grunsky 1933: 1)。以下、朝枝の関係したテンプレトン・クロッカー探検隊について順次見て行きたい。

### 3.1 カリフォルニア科学アカデミーのテンプレートン・クロッカー探検 (1932年3月10日から9月1日)

朝枝が最初に関わったのは、カリフォルニア科学アカデミーによるテンプレートン・クロッカー探検である。出発直後には「レビジャヒヘド諸島へのカリフォルニア科学アカデミーの科学的探検（California Academy of Sciences Expedition to Revillagigedo Archipelago）」とこの探検隊を呼称する報告書もあるが（Science 192: 352-353），最終的に名称は、「カリフォルニア科学アカデミーのテンプレートン・クロッカー探検」に落ち着いた（Hanna 1932: 375）。

同探検隊は、1932年3月10日にサンフランシスコを出港し、同年9月1日に同港に帰還した（Crocker 1933b: 3; Grunsky 1933: 2）<sup>10)</sup>。主たる目的地はガラパゴス諸島で、往復の航路で南北アメリカ大陸の太平洋沿岸域をめぐる。ガラパゴス諸島での滞在期間は、4月15日から6月16日にわたり、13の島々を訪問している（Slevin 1959: 124-125）。探検全体の航路（地図2）及びガラパゴス諸島における航路（地図3）は、本稿末尾に掲載した。旅程（表2）は以下となる。

表2 カリフォルニア科学アカデミーのテンプレートン・クロッカー探検の詳細旅程<sup>11)</sup>

年	月 日	場 所
1932年	3月10日	[アメリカ] サンフランシスコ
	3月12日	[アメリカ] サン・ニコラス島
	3月14日	[アメリカ] サンディエゴ
	3月15日	[メキシコ] エンセナダ
	3月16日	[メキシコ] グアダルーベ島
	3月22日	[メキシコ] クラリオン島 (3月24日まで)
	3月28日	[メキシコ] ソコロ島 (3月29日)
	4月2日	[メキシコ] アカプルコ (4月7日まで)
	4月15日	[エクアドル] ガラパゴス諸島サンクリストバル島
	4月16日	[エクアドル] ガラパゴス諸島ピント島 (停泊はマルチェナ島)
	4月17日	[エクアドル] ガラパゴス諸島サンクリストバル島
	4月19日	[エクアドル] ガラパゴス諸島エスパニョラ島
	4月23日	[エクアドル] ガラパゴス諸島フロレーナ島 (4月27日まで)
	4月27日	[エクアドル] ガラパゴス諸島イサベラ島

5月 1日	[エクアドル] ガラパゴス諸島サンタ・クルス島 (5月14日まで)
5月 9日	クロッカー山登頂
5月14日	[エクアドル] ガラパゴス諸島フロレアーナ島
5月21日	[エクアドル] ガラパゴス諸島イサベラ島
5月28日	[エクアドル] ガラパゴス諸島フェルナンディナ島
5月29日	[エクアドル] ガラパゴス諸島イサベラ島
6月 1日	[エクアドル] ガラパゴス諸島フェルナンディナ島
6月 3日	[エクアドル] ガラパゴス諸島サンチャゴ島
6月 6日	[エクアドル] ガラパゴス諸島ラビダ島
6月 7日	[エクアドル] ガラパゴス諸島ピンソン島
6月 8日	[エクアドル] ガラパゴス諸島サンタクルス島コンウエイ湾
6月10日	[エクアドル] ガラパゴス諸島バルトラ島
6月11日	[エクアドル] ガラパゴス諸島ノースセイモア島
6月13日	[エクアドル] ガラパゴス諸島サンチャゴ島サリヴァン湾
6月15日	[エクアドル] ガラパゴス諸島ヘノベサ島 (6月17日まで)
6月22日	[チリ] プンタ・アレナス (6月26日)
6月28日	[チリ] ココス島
6月30日	[チリ] プンタ・アレナス
7月 2日	[コスタリカ] ブラシリト湾
7月 3日	[コスタリカ] ムルシエラゴ湾 (7月4日まで)
7月 4日	[コスタリカ] ポート・バーカー
7月 5日	[ニカラグア] コリント
7月 6日	[ニカラグア、ホンジュラス、エルサルバドル] フォンセカ湾
7月 8日	[エルサルバドル] ラ・ウニオン
7月18日	[メキシコ] マンサニーヨ
7月20日	[メキシコ] バンデラス湾 (7月21日まで)
7月23日	[メキシコ] イスラス・マリアス (7月27日まで)
7月27日	[メキシコ] イサベラ島
7月30日	[メキシコ] マサトラン (8月3日まで)
8月 5日	[メキシコ] サン・ルカス岬 (8月7日まで)
8月 8日	[メキシコ] マグダレーナ湾 (8月11日まで)
8月14日	[メキシコ] トルトゥガス (8月15日まで)
8月15日	[メキシコ] セドロス島 (8月18日まで)
8月18日	[メキシコ] サン・ベニート島
8月19日	[メキシコ] サン・マルティン
8月22日	[メキシコ] エンセナダ
8月23日	[アメリカ] サンディエゴ
9月 1日	[アメリカ] サンフランシスコ

探検の目的は、サンフランシスコ南部からガラパゴス諸島まで9,046マイルを覆う生物学的探索にあった。とくにガラパゴス諸島の植物学、魚類学、鳥類学の詳細な収集には精力が割かれ、スタインハート (Steinhart) 水族館のために生きた魚類の標本331件が、持ち帰られた。往復の道中、メキシコ及び中央アメリカの西海岸、ココス島、イスラス・マリアスの三つの島 (Tres Marias Islands)、レビジャヒヘド諸島、セドロス島 (Cedros Island)、グアダルルーペ島 (Guadalupe Island)、サン・ニコラス島 (San Nicolas Island) にも立ち寄っている。また化石から動植物標本までのさまざまな収集物が成果として言及されているなか、未踏の地であったサンタ・クルス島の火山への登頂も史上初の快挙とされる (Hanna 1932: 376)。この山は隊長の名前にちなみクロッカー山といまでも呼ばれている。

ガラパゴス諸島はダーウィンの研究以降、世界中の生物学者の注目を集める島々であった。19世紀後半から探検隊が足を運び、1873年には最初の組織的な学術探検隊がハーバード大学より派遣されていた。20世紀にはいっても、そうした流れは絶えることがない。カリフォルニア科学アカデミーのガラパゴス諸島とのかかわりも20世紀初頭からはじまる。同アカデミーは、1905年に第一回の探検隊を派遣しており、朝枝が参加したのは第二回目の探検隊にあたる (伊藤 1983: 35-36; 200-201)。

探検のメンバーとしてザカ号に乗船したのは、船員関係と学術関係者からなる。前者の乗船スタッフは、クロッカーの秘書兼昆虫の収集者であるモーリス・ウィロウズ<sup>12)</sup> (Maurice Willows) を含めて16名に及んだ。クロッカーとガーランド・ロッチ (Garland Rotch) 船長、アルバート・ラーセン (Albert F. Larsen) 医師の3名。下級船員には、一等航海士と二等航海士 (各1名)、通信士 (1名)、機関長と二等機関士 (各1名)、料理長とアシスタント (各1名)、船室係と助手 (各1名) のほか4名の水夫がいた (Crocker 1933b: 3)。その中で目を引くのは、熟練航海士のフランク・タイガ (Frank Taiga) と給仕のペマサ・ウトゥ (Pemasa Utu)<sup>13)</sup> というサモア人が2名含まれていたことである (Crocker 1933b: 7)。

後者の研究スタッフは、カリフォルニア科学アカデミーの関係者で占められた。哺乳類学・鳥類学担当の学芸員のハリー・スワース (Harry S. Swarth)、魚類部門のアシスタント学芸員ウォルトン・クラーク (H. Walton Clark)、植物部門のアシスタント学芸員ジョン・トーマス・ホーウェル (John Thomas Howell)、スタイン

ハート水族館の副局長 (assistant superintendent) ロバート・ラニア (Robert J. Lanier) である。朝枝の名前は、最後に「画家・写真家」として言及されている。合計 5 名であった (Crocker 1933b: 7)。

この探検に参加した段階で、朝枝は、「ゼーン・グレイが熱帯太平洋に最近探検した際の画家・写真家であり、第一級の画家であるだけでなく、カラー写真の専門家である。魚類や海洋生物の生きた状態の水彩画において多大な経験を有している」(Science 1932: 352) と紹介されている。この文章はふたつの意味で興味深い。まず、朝枝とゼーン・グレイとのかかわりを示す文言が含まれているからである。両者の関係を示す資料が少ないなか、貴重な第三者による言及である。もうひとつは、彼がこの探検隊に参加する以前に撮影したカラー写真や描いた海洋生物の水彩画は、いまのところ発見されていないからである。この記事内容に誤りがないのであれば、彼は探検隊に参加する前の段階ですでにそうした技術をかなりのレベルで習得していたということになる。

本探検隊で朝枝が果たした職務について、クロッカー自身が一節割いて説明している。彼の探検中の姿を垣間見ることができる数少ない証言である。以下やや長くなるが、引用する。

探検での活躍を列記した科学者のリストにトシオ・アサエダを加えたい。彼は、探検中に会った海洋生物の瞳目すべき標本を水彩画で再現する卓越した能力があることを証明した。海上にいる 5 ヶ月と 3 週間の間に、彼は、鳥類、爬虫類、昆虫のほか、魚類、蟹とそれ以外の海洋生物のおよそ 300 件の個体標本を驚くほど忠実な輪郭と色彩のもとで描いた。アサエダはまた探検隊のカメラマンでもあり、探検が終わるときには、彼の名の付く写真約 1,400 枚を撮影した (Crocker 1933b: 4)。

クロッカーの証言は同船者への誉め言葉だけではなかろう。他の証言もある。魚類学者のクラークも、「芸術家であるトシオ・アサエダによって写生された約 170 種を描く 150 枚の彩色画と色のヴァリエーションを示す数枚の複製は、いつか将来出版されることが望まれる」(Clark 1936: 395) とわざわざ言及しているほどである。さらにこの探検のさなかに採集された魚 (*Monolene asaetae*) は、「探検隊の賢明で熟達した芸術家であるトシオ・アサエダにちなんで命名」(Clark 1936: 386) された (図 1)。

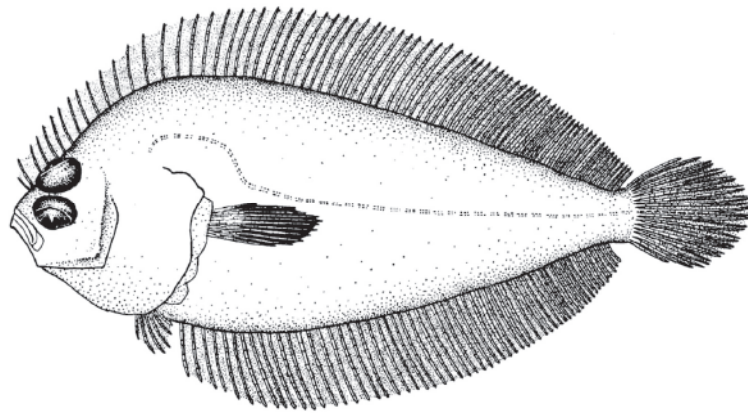


図1 *Monolene asaedai* の標本画 (Perkins 1963: 293 Fig. 1)<sup>14)</sup>

こうした探検の成果について、朝枝自身が紹介する機会もあった。まず、おそらくこの探検時に撮影した鳥類の写真による展示を開いている。第50回アメリカ鳥類学者連合 (The American Ornithologists' Union) が、1932年10月17日から20日の間にケベックで開催された時、同地で有名なホテルであるシャトー・フロンテナックのロビーにて150枚の写真が展示されていた。朝枝も、12名の写真家の一人として登場していたのである (Palmer 1933: 69)。

1933年3月24日には、次節で述べる探検の途次ハワイに立ち寄り、パン・パシフィック科学会議 (Pan-Pacific science meeting) で講演を行っている。内容はガラパゴスの探検についてであり、探検のあいまに彼がたくさんのスケッチを描いたことも記事では言及されている (Hawaii Hochi 1933: 2; 日布時事 1933: 3)。

### 3.2 ソロモン諸島へのテンブルトン・クロッカー探検 (1933年3月2日から9月15日)

朝枝がクロッカー隊として2回目に参加した探検は、「ソロモン諸島へのテンブルトン・クロッカー探検」と呼ばれるものである。期間は、1933年3月2日から9月15日までであった (Science 1934: 344)。

調査の経路は、1933年3月2日にサンフランシスコを出発して、メキシコを経由してハワイに向かうものだった。ソロモンへの途上では、パルミラ環礁、クッ



ク諸島のプカプカ、アメリカ領サモアのパゴパゴ、フィジーのスヴァに立ち寄った。ソロモン諸島へは、サンタクルーズ経由で入国して島々をめぐる。3月10日にシカイアナで抜錨。後述するランバート医師がトゥラギで調査をする一方<sup>15)</sup>、別の一隊はガダルカナル島で昆虫、植物、魚類の採集を行った。その後、全員でマライタ島に向かい、人類学的調査を行う。そしてこの探検のなかでも特別な目的地であったレンネル島及びペロナ島での調査となった。ソロモン調査の後は、フィジー、サモア、フェニックス諸島、ハワイを経由して、サンフランシスコに帰還。到着は、9月15日のことであった (Science 1934: 344-345)。なお、クロッカーとウィロウズは、フィジーのスヴァから蒸気船で別途先に帰国している (MacGregor 1934: 43)。探検全体の航路 (地図4) は本稿末尾に掲載した。詳細な旅程 (表3) は以下を参照のこと。

表3 ソロモン諸島へのテンプレートン・クロッカー探検の詳細旅程<sup>16)</sup>

年	月 日	場 所
1933 年	3 月 2 日	[アメリカ] サンフランシスコ
	3 月 6 日	[メキシコ] エンセナダ
	3 月 21 日	[アメリカ] ハワイ州オアフ島ホノルル (3 月 27 日まで)
	4 月 1 日	[アメリカ] パルミラ環礁
	4 月 4 日	赤道通過
	4 月 8 日	[クック諸島] プカプカ島 (4 月 10 日まで)
	4 月 12 日	[アメリカ領サモア] トウトウイラ島・パゴパゴ (4 月 19 日まで)
	4 月 21 日	[クック諸島] プカプカ島
	4 月 24 日	[フィジー] ヴィティ・レヴ島スヴァ (5 月 1 日まで)
	5 月 5 日	[ソロモン諸島] ティコピア島
	5 月 6 日	[ソロモン諸島] ヴァニコロ島
	5 月 8 日	[ソロモン諸島] スパニ島
	5 月 10 日	[ソロモン諸島] リーフ諸島シカイアナ島 (5 月 17 日まで)
	5 月 18 日	[ソロモン諸島] ガダルカナル島アロア湾
	5 月 19 日	[ソロモン諸島] トゥラギ
	5 月 20 日	[ソロモン諸島] ガダルカナル島カオカ
	5 月 23 日	[ソロモン諸島] ガダルカナル島アロア湾
	5 月 24 日	[ソロモン諸島] トゥラギ (5 月 25 日まで)
	5 月 25 日	[ソロモン諸島] マライタ島アウキ湾
	5 月 29 日	[ソロモン諸島] マライタ島ラウラグーン (6 月 1 日まで)
	6 月 2 日	[ソロモン諸島] トゥラギ (6 月 3 日まで)

	6月5日	[ソロモン諸島] レネル島
	6月15日	[ソロモン諸島] レネル島・トゥアンゴンゴ
	6月18日	[ソロモン諸島] ベロナ島 (6月23日まで)
	6月24日	[ソロモン諸島] レネル島
	6月25日	[ソロモン諸島] トウラギ (6月27日まで)
	6月28日	[ソロモン諸島] ウギ島
	6月29日	[ソロモン諸島] マキラ島キラキラ
		[ソロモン諸島] サンクリストバル島スター港
	6月30日	[ソロモン諸島] サンタアナ島
		[ソロモン諸島] サンタカタリーナ島
	7月1日	[ソロモン諸島] サンクリストバル島スター港
	7月2日	[ソロモン諸島] サンタアナ島
		[ソロモン諸島] サンタカタリーナ島
		[ソロモン諸島] サンクリストバル島スター港
	7月3日	[ソロモン諸島] サンタアナ島
	7月4日	[ソロモン諸島] サンタカタリーナ島
	7月5日	[ソロモン諸島] サンクリストバル島スター港
		[ソロモン諸島] マキラ島キラキラ
	7月7日	[ソロモン諸島] リーフ諸島モホーク湾
		[ソロモン諸島] リーフ諸島マテマ島 (7月8日まで)
	7月8日	[ソロモン諸島] リーフ諸島モホーク湾
	7月11日	[ソロモン諸島] サンタクルーズ島グラシオサ湾
	7月12日	[ソロモン諸島] ヴァニコロ島 (7月13日まで)
	7月15日	[ソロモン諸島] アスタ島 (7月18日まで)
	7月23日	[フィジー] ヴィティ・レヴ島スヴァ (8月1日まで)
	8月5日	[アメリカ領サモア] トウトウイラ島 (8月8日まで)
	8月11日	[キリバス] フェニックス諸島オロナ島
	8月13日	[キリバス] フェニックス諸島マンラ島
	8月25日	[アメリカ] ハワイ州オアフ島ホノルル (9月1日まで)
	9月15日	[アメリカ] サンフランシスコ

探検隊のメンバーは、リーダーとしてのクロッカーのほか、ロックフェラー財団の局長でフィジーのスヴァをベースとする西太平洋健康サービスで勤務していた医者マイケル・シルヴェスター・ランバート (Michael Sylvester Lambert)、イギリス領ソロモン諸島健康部局のゴードン・ホワイト (Gordon White)、フィジー人の医療従事者であるマラカイ・ヴェイサマサマ (Malakai Veisamasama)、ハワイのビショップ博物館の民族学者ゴードン・マクレガー (Gordon MacGregor)、カリ

フォルニア・サンタバーバラの博物学者スチュワート・ノートン (Stewart Norton), 船医のジョン・ハインズ (John Hynes), 及び先述のモーリス・ウィロウズがいた。そしてもちろん朝枝である (Journal of the Polynesian Society 1933: 130–131; Science 1934: 344; The Museum News 1934: 3; Lambert 1941: 315–316; Moore 2019: 347–348)<sup>17)</sup>。

朝枝は、「画家, 写真家。民族学的な写真を 200 枚以上撮影し, 魚類と海洋生物の水彩画を 100 枚以上描いた」という (Field Museum News 1934: 3)。これらを含んだクロッカー探検隊の残した資料や写真は, 同時期になされていた別の私的探検隊の収集物とともに, 「20 世紀初頭の自然, 物質文化, 人類学に関する文献においてソロモン諸島を中心的なものとすることに貢献した」といまでは評価されている (Moore 2019: 348)。カヌーについての情報も収集していたようで, ケンブリッジ大学考古学人類学博物館とハワイのビショップ博物館には朝枝のスケッチが残されている (MacGregor 1934: 43)<sup>18)</sup>。この探検隊で撮影されたソロモン諸島の写真とスケッチは, ハッドンとホーネルによるオセアニアのカヌーの研究において十分に活用されている (Haddon and Hornell 1975 [1936, 1937, 1938]: 40–120)。ソロモン諸島以外では, クック諸島の例が挙げられる。マクレガーの著作には朝枝の名前が記載されており, それによるとカヌーのスケッチが彼の手によると推測できる (MacGregor 1935: 35; Fig. 9; Fig. 10)。さらに 1930 年代と 1940 年代に刊行されたクック諸島の古典的民族誌において朝枝のスケッチ (Beaglehole and Beaglehole 1971 [1938]: 170–171) や写真 (Beaglehole 1944; Beaglehole and Beaglehole 1971 [1938]: Plate1, Plate2) が活用されていることもわかる (山口 2019)。

ソロモン諸島での調査内容は多岐にわたった。上述メンバーに医療関係者が複数含まれているように, 熱帯医療や民族医療的な研究が視野に入れられていた。たとえば, シカイアナでは「結核, フランベジア, フィラリア, マラリアの流行や, 宗教的信仰, 慣習, 社会組織について」の調査, マライタのタイ地区 (Tai district) では「ツベルクリンと身体測定の大規模調査」が行われていた (Science 1934: 345)。

それ以外のテーマとしては, 人類学的・民族学的な研究があげられる。こちらはポリネシアンアウトライアーの調査が中心的に考えられていた (MacGregor 1934: 38)。したがってレンネル島・ペロナ島が特に選ばれている。ゴードン・マクレガーは民族誌の標本の収集を担当しており, レンネル島では歌の音声録音, 「レン

ネル, ペロナ, サンタカタリナ, サンタクルツ島のグラシオサ湾 (Graciosa Bay) では, 現地人の生活, 特にダンスの 10,000 フィートの動画を撮影」など行っていた (Field Museum News 1934: 3)。

またこの航海を通じて大量の標本類が集められた。約 3,200 点の収集品, 1,400 枚の写真, 海洋生物を描く数多くの絵画が作り出されたが, そのうち植物や軟体動物に関わる収集品はビショップ博物館へ, 昆虫はカリフォルニア科学アカデミーへ, カヌーに関する研究はケンブリッジ大学のハッドンのもとへと寄贈されたという。また, それ以外の収集品は, アメリカやヨーロッパに散在している (Science 1934: 344-345)。たとえばアメリカのフィールド・ミュージアムへは, 854 件の民族資料と 323 枚の写真が寄贈され, 1934 年 6 月には, ジョゼフ・N・フィールド・ホール (Joseph N. Field Hall) に展示されていた (Field Museum News 1934: 3)。

朝枝とより関係しているところでは, 魚類の標本がある。この探検では, 248 種 1830 体に及ぶ魚類の標本が収集されたが (Seale 1935: 337), 朝枝自身も収集者のひとりであった。1933 年 4 月 14 日に, サモア, トウトウイラ島のパゴパゴで, 体長 20 から 21 ミリに相当するテンジクダイの 4 件の標本を採集している。カリフォルニア科学アカデミーのスタインハート水族館長であるアルヴィン・シール (Alvin Seale) は, 「クロッカー探検隊の熟練した画家」である朝枝の名前にちなんで, 「*Apogon asaetae*」と命名している (Seale 1935: 358) (図 2)。なお, 図 2 の標本画は朝枝が作成したものである。

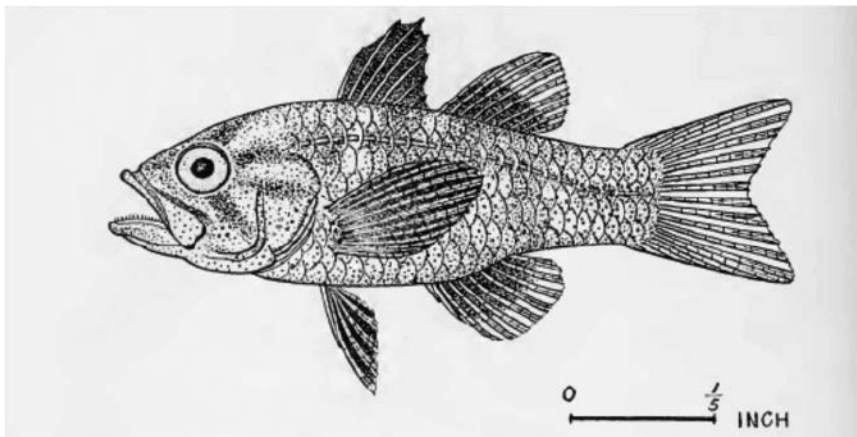


図 2 *Apogon asaetae* の標本画 (Seale 1935: Figure 1 of Plate 23)

### 3.3 東ポリネシアへのアメリカ自然史博物館のテンプレートン・クロッカー探検 (1934 年 9 月 15 日から 1935 年 4 月 16 日)

アメリカ自然史博物館の雑誌『ナチュラル・ヒストリー』に掲載されたエッセイにおいて、本探検は「テンプレートン・クロッカーの南太平洋探検 (Templeton Crocker Expedition to the South Pacific)」と記載されているが (Chapin 1936b: 31), これが正式なものなのか不明である。他の探検との区別のつけやすさも考慮して、ここではカリフォルニア科学アカデミーで使用されているインデックスに依拠して上述の名前とした。また帰国日が明記されているのはここだけであったのでそれを採用している (Davis n.d.)。旅程は、1934 年 9 月 15 日にサンフランシスコを出発、フランス領ポリネシア、ピトケアン、ラパヌイを経由するものであった。帰路には南米大陸の太平洋岸の島々にも寄港した。そのなかには、サン・フェリックス島やガラパゴス諸島も含まれていた。朝枝にとって二度目のガラパゴス探訪は、この際に実現したものである。1935 年ということでダーウィンが上陸してからちょうど百年目であった。全体の航路 (地図 5) は本稿末尾に掲載した。詳細な旅程 (表 4) は以下を参照のこと。

表 4 東ポリネシアへのアメリカ自然史博物館のテンプレートン・クロッカー探検の詳細旅程<sup>19)</sup>

年	月 日	場 所
1934 年	9 月 15 日	[アメリカ] サンフランシスコ
	9 月 18 日	[アメリカ] ロサンゼルス
	10 月 6 日	[フランス領ポリネシア] マルケサス諸島ヌクヒヴァ島
	10 月 19 日	[フランス領ポリネシア] マルケサス諸島ヒヴァオア島
	10 月 21 日	[フランス領ポリネシア] マルケサス諸島ファトゥ・ヒヴァ島
	移動中	[フランス領ポリネシア] ツアモツ諸島プカブカ島
	10 月 24 日	[フランス領ポリネシア] ツアモツ諸島タタコト島
	10 月 26 日	[フランス領ポリネシア] ツアモツ諸島ハオ島 (11 月 5 日まで)
	11 月 5 日	[フランス領ポリネシア] ツアモツ諸島ネンゴネンゴ島 (11 月 5 日まで)
	11 月 9 日	[フランス領ポリネシア] ソサエティ諸島タヒチ島
	11 月 20 日	[フランス領ポリネシア] ソサエティ諸島モーレア島 (11 月 21 日まで)
	11 月 22 日	[フランス領ポリネシア] ソサエティ諸島タヒチ島 (11 月 23 日まで)
	11 月 25 日	[フランス領ポリネシア] オーストラル諸島リマトラ島
	11 月 26 日	[フランス領ポリネシア] オーストラル諸島ルトゥ島 (11 月 28 日)

	12月 1日	[フランス領ポリネシア] オーストラル諸島ライヴァヴァエ島 (12月5日まで)
	12月 7日	[フランス領ポリネシア] オーストラル諸島ラバ島 (12月9日まで)
	12月13日	[フランス領ポリネシア] ガンビエ諸島マンガレヴァ島 (12月21日)
	12月23日	[ピトケアン諸島] ピトケアン島 (1月1日まで)
1935年	1月 3日	[ピトケアン諸島] デュシー島 (1月3日まで)
	1月13日	[チリ] ラバヌイ (イースター島) (1月19日まで)
	1月30日	[チリ] アルハンドロ・セルカーク
	1月31日	[チリ] ファン・ヘルナンデス (1月31日まで)
	2月 4日	[チリ] バルパライソ (2月12日まで)
	2月14日	[チリ] コキンボ (2月14日まで)
	2月18日	[チリ] サン・フェリックス
		[チリ] サン・アンブロシオ (2月18日まで)
	2月23日	[ペルー] ピスコ
		[ペルー] チンチャ (2月26日まで)
	2月27日	[ペルー] カリアオ (3月3日まで)
	3月 9日	[エクアドル] ガラパゴス諸島 (3月26日まで)
	4月 5日	[パナマ] パナマ (4月5日まで)
	4月15日	[メキシコ] マンサニーヨ (4月15日まで)
	4月24日	[アメリカ] サンフランシスコ

さまざまな目的をもってこの渡航がなされたが、ここでは三つにまとめる。ひとつめが、アメリカ自然史博物館のホイットニー・ウィングにおける展示用に鳥類の標本を入手するためであった。マルケサスとツアモツから2グループ、ペルーのバード諸島から1グループ、ガラパゴスから1グループの合計4グループの鳥類の捕獲が計画されていた。このために同博物館からフランシス・ジャック (Francis L. Jaques) とジェイムズ・チャピン (James P. Chapin) が参加した (Chapin 1935a: 281; 1935b: 293)。国立民族学博物館の朝枝利男コレクションにも大量の鳥類の写真が残されている。

もうひとつが、ポリネシアにおける形質人類学的調査である。探検の経路にピトケアンとラバヌイが加えられたのは、主にこのためであった。アメリカ自然史博物館のハリー・シャピロ (Harry Shapiro) は、これが目的で参加していた (Chapin 1935b: 293)<sup>20)</sup>。こちらの調査には、船医であったジョージ・ライマン (George Lyman) も協力したという (Chapin 1935b: 294)。「古代の頭蓋骨と骨を集めて純血

のイースター島民についての人種的研究をする予定である」とシャピロは書いている (Shapiro 1935: 366)。シャピロは、帰路に別途バルパライソ (Valparaiso) で下船するなど別行動であった (Chapin 1935a: 283; 1936b: 34)。

そして最後に、イースター島でアメリカ自然史博物館のためにモアイ像の複製を作成することであった。朝枝はいつもの写真撮影とは異なるこの手間のかかる仕事を任されたようで、特別に言及がなされている。「煮えたぎる太陽のもと虫の雲霞に囲まれながら、トシオ・アセイダ氏は像の型を取るために何日も骨を折った。それぞれ注意深く番号を付されながら型は部分ごとにとられ、最終的には博物館に展示される」という状況だった (Shapiro 1935: 369)。モアイ像は、アメリカ自然史博物館の入り口 (entrance hall) に設置された。それを報道する記事でも、完成したモアイ像の写真とともに上記と同じ言葉づかいで朝枝の苦労がねぎらわれている (Science News Letter 1936: 83)。

探検の途次には 1,500 枚以上の写真と多数の標本が集められている。クロッカー自身は、海洋無脊椎動物、魚類、藻類を、その助手であったウィロウズは昆虫の収集を行った。435 件の植物標本も採集された。こうした標本は、アメリカ自然史博物館、カリフォルニア科学アカデミー、ニューヨーク植物園のあいだで分けられたという (Chapin 1935a: 285)。

本探検に参加した上記以外のメンバーは、いつものザカ号の船員であったようだ。テンプレートン・クロッカーの他、キャプテンのアルフレッド・ペダーセン (Alfred Pedersen)、昆虫収集担当のモーリス・ウィロウズ、そして朝枝など 14 名が確認できる。朝枝は、「写真撮影の専門家で、ほとんどすべてのクロッカーによる太平洋探検で有能な助手を務めている」と言及されている (Chapin 1935b: 293–294)。実際に、フランス領ポリネシア・マンガレヴァに関する古典的民族誌においても、本探検における彼の証言と彼の撮影した写真が使用されている (Emory 1971 [1939]: 31–32; Plate 1; Plate 2)。

### 3.4 テンプレートン・クロッカーによるメキシコ・バジャへの釣り旅行 (1935 年 11 月 5 日)

この旅行の名称は、カリフォルニア科学アカデミーのデータベースに記載されているデータに準拠して使用している (Davis n.d.)。日時は同データベースによ

ると11月6日だが同時代の複数の新聞記事が5日と記載しているので、そちらを採用している（*The Japanese American News* 1935: 1; 日米新聞 1935: 3）。また帰国時については、クリスマス前に帰国予定との言及は見つかるが（日米新聞 1935: 3）、実際の日時は不明である。

旅の目的について、ある記事ではスミソニアン協会から依頼されて珍しい魚類を採集したとある（*San Bernardino Daily Sun* 1935: 17; cf., 日米新聞 1935: 3）。ただし具体的にそれ以上の何が行われたのか明らかでない。カリフォルニア科学アカデミーにはこの旅行に際して撮影された写真のアルバムが一冊残されている。そのタイトルは「釣り旅行 (fishing trip)」とされており内容もそれに相応しいこと<sup>21)</sup>、またふたつの探検のはざまに短期で行われていることなどから、小規模で私的な旅であったと推測できる。先の記事に「クラツガー氏を始め多数の扶桑富豪連を同伴」「今回は保養を兼ねた旅行」などの文言があることも、そのことを裏書きしている（日米新聞 1935: 3）。

朝枝もこの旅に関しては日記をつけていなかったのか、残されていない。ただし彼が参加したことはアメリカの日系人の新聞で取り上げられているので間違いない（*The Japanese American News* 1935: 1; 日米新聞 1935: 3）。さらにカリフォルニア科学アカデミーに所蔵された写真集に収められた写真の一枚には、大きな魚を解体している朝枝の後ろ姿が映しこまれている。アルバムに同封されたインデックス 43 番には、「バショウカジキの骨を保存するトシオ」と記載されている<sup>22)</sup>。キャプションに彼の名前が言及されている珍しい箇所である。

なおアレンの論考では、「1935年のカリフォルニア湾のテンプレートン・クロッカー探検」が取り上げられている（Allen 1938: 328-335）。この探検は、1935年11月15日から20日にかけて植物プランクトン（Phytoplankton）の収集のためになされたという（Allen 1938: 331）。経路の地図は掲載されているが（Allen 1938: 329）、乗船メンバーや研究スタッフについての情報はない。カリフォルニア科学アカデミーのインデックスにも国立民族学博物館の朝枝利男コレクションにも言及がないので、クロッカーも朝枝も参加していない探検なのかもしれない。ここでとりあげたバジャへの釣りの旅と日程も近いが、さしあたり別個のものと考えられよう。



### 3.5 ニューヨーク動物協会のテンプレートン・クロッカー探検 (1936年3月16日から5月28日)

探検の名称は、ニューヨーク動物協会が刊行している『ズーロジカ』で使用されている名称を用いた (Beebe 1937: 36)。1936年3月下旬にサンディエゴ (San Diego) を出港し、カリフォルニア半島 (Lower California) の太平洋岸に沿って、いくつかの離島を巡行。ついで、カリフォルニア湾の内側に沿って調査している。ニューヨーク動物協会のウィリアム・ビーブ (William Beebe) の報告によると、探検は3月25日から5月25日まで続けられた。詳細な旅程と地図も論考に収められている (Beebe 1937: 36)。一方で朝枝が作成したと思われる地図では航海の期間が、3月16日から5月28日とされている。理由は明らかで、朝枝はサンフランシスコを出発点と終点にしているからだ。これはザカ号の乗組員の経路とニューヨーク動物協会側の研究スタッフの移動経路が異なっていることを示している。本稿では、朝枝のデータをもとにした日程を採用してある (表5)。また全体の航路は本稿末尾に掲載する (地図6)。

表5 ニューヨーク動物協会のテンプレートン・クロッカー探検の詳細旅程<sup>23)</sup>

年	月 日	場 所
1936年	3月16日	[アメリカ] サンフランシスコ
	3月19日	[アメリカ] サンディエゴ
	3月20日	[アメリカ] カタリーナ島 (3月22日まで)
	3月22日	[アメリカ] サンディエゴ (3月25日)
	3月27日	[メキシコ] セドロス島 (3月27日まで)
		[メキシコ] タートル湾
	3月29日	[メキシコ] マグダレーナ湾
	3月30日	[メキシコ] サン・ルカス岬 (4月3日まで)
	4月 3日	[メキシコ] ゴルダ・バンク
	4月 4日	[メキシコ] アレーナ・バンク
		[メキシコ] セラルボ島
		[メキシコ] エスピリト・サント島
	4月 6日	[メキシコ] グアイマス (4月8日まで)
	4月 9日	[メキシコ] サンタ・イネス湾 (4月17日まで)
	4月19日	[メキシコ] アレーナ・バンク (4月21日まで)
	4月21日	[メキシコ] ゴルダ・バンク (4月23日まで)

4月23日	[メキシコ] サン・ルカス岬 (4月26日まで)
4月27日	[メキシコ] マサトラン (4月28日まで)
4月30日	[メキシコ] アレーナ・バンク (5月2日まで)
5月2日	[メキシコ] ゴルダ・バンク (5月3日まで)
5月3日	[メキシコ] サン・ルカス岬 (5月7日まで)
5月10日	[メキシコ] クラリオン島 (5月16日まで)
5月19日	[メキシコ] ロカス・アリホス (5月19日まで)
5月22日	[メキシコ] セドロス島
5月25日	[アメリカ] サンディエゴ
5月28日	[アメリカ] サンフランシスコ

探検の目的は、当時ほとんど知られていなかったバジャ・カリフォルニアの動物相を知るためであった。ニューヨーク動物協会はそれまで大西洋を中心に調査していたので、そこでの生物相とは全く違うことが予想される太平洋側のそれと比較することも目的にあったという (Gould 2004: 331-333)。

探検隊として乗船した研究スタッフは、ニューヨーク動物協会の熱帯研究所からウィリアム・ビーブ、ジョン・テー＝ヴァン (John Tee-Van)、ジョセリン・クレイン (Jocelyn Crane)、画家ジョージ・スワンソン (George Swanson) であった。搭乗メンバーのなかに朝枝もおり、ビーブは、「クロッカー氏の画家、写真家、剥製師。彼の絶えることない情熱と自らに課した職務を達成せしめていることはつねに記憶されるであろう」との簡潔な紹介という枠を超えた賛辞のもと真っ先に紹介している。船員として言及されているのは、彼とアルフレッド・ペダーセン船長以外では、先述したサモア人2名である (Beebe 1937: 33; cf., Beebe 1938b: vii-viii)。

ウィリアム・ビーブは、深海生物の観察、ガラパゴスの探検で名を馳せた博物学者であった。探検の様子を記述した一般読者向けの著作を数多くものし、『ガラパゴス—世界の果て』は、ベストセラーになり広く読まれていた。朝枝が最初に旅をともしたグレイがガラパゴスへの旅を決めたのも (Pauly 2007: 245)、朝枝が探検の途上にガラパゴスにて出会ったドイツ人が本国から離れた世界での生活を決意したのも (トレハン 1991: 36)、切っ掛けにはこの本があった。朝枝もおそらく目を通していただと思われるが、ほかならぬガラパゴス界隈に多大な影響を与えた人物と再びガラパゴスの土地に足を踏み入れることになった心境はどのよう



図3 *Cymatosyrinx asaedai* の写真 (Hertlein and Strong 1951: Figure 4 of Plate I)

なものだったのだろうか<sup>24)</sup>。

本探検で航路をともにしていたビーブの著作の中では調査中の生き生きとした朝枝の姿も取り上げられている。カイアシ類の新種の発見に一役買い (Beebe 1938b: 74), 写真撮影中に魚に噛まれてケガをして (Beebe 1938b: 78), 満月を眺めているさなか月のなかの米つきをするウサギを見出す日本文化を紹介し (Beebe 1938b: 180), アナホリフクロウを捕まえ生きたままアメリカまで運び (Beebe 1938b: 244), サンゴの上部やバタフライ・フィッシュのスケッチをしてもいた (Beebe 1938b: 272)。水中眼鏡越しに絵を描く試みもしており, 朝枝によって描かれたバタフライ・フィッシュの絵をみたビーブは, 水中での探検が「99パーセントの勝利」であったと手ごたえを感じていたという (Beebe 1938b: 278–279)。

なお, この探検のなかでカリフォルニア湾のアリーナバンクで採集された貝類は, 朝枝の名前にちなんで「*Cymatosyrinx asaedai*」と命名されている (Hertlein and Strong 1951: 78) (図3)。

### 3.6 サモアとハワイ諸島へのアメリカ自然史博物館のテンブルトン・クロッカー探検 (1936年8月18日から1937年1月17日)

先の探検隊派遣からおおよそ3か月後, はやくも別の探検隊が動き出す。今度はアメリカ自然史博物館との共同による探検である。本探検の名称と期間は, カリフォルニア科学アカデミーのデータベースに記載されているデータに準拠している (Davis n.d.)。

旅程は, サンフランシスコを8月18日に出港して, ハワイ, クリスマス島, サ

モアをめぐるものであった。レイサン、クック諸島のトンガレヴァにも寄港している。アメリカ自然史博物館の海洋世界のホールと太平洋の鳥類の世界を展示する新しいホイットニー記念ホールのための標本収集を目的としていた（*Science* 1936: 220; cf., Bailey 1953: 7-8）。朝枝自身は新聞記者に答えて、①クリスマス島での海底標本作り、②サモアでの鳥類の模型作り、③レイサン島でのアホウドリの巣の標本作り、④カウアイ島での鳥類の標本作りの四つの目的があると語っている（*日布時事* 1936a: 3）<sup>25)</sup>。全体の航路（地図7）は本稿の末尾を、詳細な旅程（表6）は以下を参照のこと。

表6 サモアとハワイ諸島へのアメリカ自然史博物館のテンプレートン・クロッカー探検の詳細旅程<sup>26)</sup>

年	月 日	場 所
1936年	8月18日	[アメリカ] サンフランシスコ
	8月31日	[アメリカ] ハワイ州オアフ島ホノルル（9月7日まで）
	9月14日	[キリバス] ライン諸島クリスマス島
	9月15日	赤道通過
	9月18日	[クック諸島] トンガレヴァ島（10月1日まで）
		[アメリカ領サモア] トウトウイラ島
		[サモア] サヴァイイ島
		[アメリカ領サモア] トウトウイラ島
		[アメリカ] ライン諸島ジャーヴィス島
		[キリバス] ライン諸島タブアエラン島
	11月12日	[アメリカ] ハワイ州オアフ島ホノルル（11月16日まで）
	11月16日	[アメリカ] ハワイ州カウアイ島（11月29日まで）
	12月13日	[アメリカ] ハワイ州レイサン島（12月15日まで）
		[アメリカ] ハワイ州フレンチフリゲート礁
1937年	1月17日	[アメリカ] サンフランシスコ

クロッカーと朝枝以外の探検隊のメンバーには、アメリカ自然史博物館からロイ・ワルド・マイナー（Roy Waldo Miner）、画家で模型製作者のクリス・オルセン（Chris E. Olsen）、ウイリス・ベッツ（Wyllys Rossiter Betts）、ウィリアム・コルタス（William F. Coultas）がいた（*Science* 1936: 220; Miner 1938b: 45; Ward 1939: 1）。ただし一同が同じ経路をとったわけではなく、マイナーはハワイで乗船し、帰国も彼の一行は先に別便でサンフランシスコに戻っている（*Science* 1936: 221; cf., Ely and Clapp 1973: 301）。

探検において、クリスマス島では、サンゴ礁の展示に加えるための真珠貝の収集と観察がなされた。収集作業には現地人の潜水夫<sup>27)</sup>に協力を仰いでいる。そしてオルセンは、海中の景観や収集作業の様子について水面下にて潜ったままで油彩の絵を描いていた (Science 1936: 220–221; Miner 1938a: 365–390, 1941: 251–264)。またこの探検の間にマイナーは、サンゴ礁における海洋生活を数千枚の写真に収め、彼とベッツはそれらの観察をノートに記録したという (Orser 1983: 5)。

サモア及びハワイ諸島のカウアイとレイサン島では、コルタスが鳥類の研究として、関係する資料の収集と写真の撮影を行った (Science 1936: 220–221)。

朝枝の活躍については後年、以下のように回顧されている。

色鮮やかな魚類、威嚇するウツボ、タコ、数多の牡蠣、無脊椎生物が収集され、水面へと持ち寄られた。これらの色が失われると思われる生き物たちは、日本人芸術家であるトシオに与えられた。彼はすぐさまカラーパターンの正確な記録をとった。展示を準備する際に参考にするために、毎晩、彼はスケッチを完成された絵画へと転換した。トシオの絵画を使いながら、展示係が魚類を類としてだけでなく厳密な個体として再現するために、それぞれの石膏モデルが作成された (Orser 1983: 5)。

本探検で収集された資料を用いたアメリカ自然史博物館の海洋世界に関する展示場は、1941年6月10日に公開されている (Science 1941: 560–561)。

### 3.7 ニューヨーク動物協会の東太平洋探検 (1937年11月1日から1938年5月5日)

3.5に続きニューヨーク動物協会との2回目の航海が、1937年から1938年にかけて行われた。探検の名称は、「ニューヨーク動物協会の第二回東太平洋探検」とするものもあるが (Science 1938: 522–523)、ニューヨーク動物協会の方の記事では「ニューヨーク動物協会の東太平洋探検」とされている (Beebe 1938a: 287; Beebe and Tee-Van 1938)。本稿では後者の名称で記載してある。

探検の主たる目的は、カリフォルニア半島西岸のセドロス島 (Cedros Island) からパナマにかけての動物相にあったという。潮だまりから500尋の深度までに生息する魚類、蟹、軟体動物の徹底的な調査がなされ、とくに生物の色彩、習性との生態学的関係に関心がもたれていた。「1,200の写真と数百の水彩画が得られた」

という記述があるが、写真や絵画のうちいくつかは、間違いなく朝枝の手によるものであろう。収集物は、ニューヨーク動物協会の実験室に収蔵されているという (Science 1938: 523)。

朝枝によって撮影された写真は、人々の印象に強く残ったことは間違いない。ビーブは、この時の探検をもとに『港の本 (Book of Bays)』を後に刊行している (Beebe 1942)。その書評のなかには、「助手のトシオ・アサエダ、ジョン・テー・ヴァン、筆者によって撮影された30枚の素晴らしい写真が本書には収められている。本書を読んでからというもの、トシオについて思いを馳せている。彼は旅の記録を複製しているのだろうか。もしそうならいまだここにあるのだろうか」 (Grady 1942: 22-23) という一節がある。おそらく日米が戦争状況にあることを念頭に置きつつ、美しい写真の撮影者である日系人の朝枝に特別に言及しているのであろう。

1937年11月5日にサンディエゴを出港し、メキシコ、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ、コロンビアをめぐる、1938年4月5日にパナマに到着するという経路をとった (Beebe 1938a: 287-298, Beebe 1938c: 147)<sup>28)</sup>。メキシコからコロンビアまでを文字通り海岸沿いに移動するものであった。調査地点は、ビーブの論考の中でも地図2枚とともに詳細に記録されている (Beebe 1938a)。朝枝のアルバムによると、出国が11月1日、帰国は5月5日になっている<sup>29)</sup>。これはビーブの記録がサンディエゴから始まりパナマで終わっているのに対して、朝枝一行はサンフランシスコを起点としているからであろう。本稿では朝枝側の記録で統一しておく。全体の航路 (地図8) は本稿末尾に掲載した。詳細な旅程 (表7) は以下を参照のこと。

表7 ニューヨーク動物協会の東太平洋探検の詳細旅程<sup>30)</sup>

年	月 日	場 所
1937年	?	[アメリカ] サンフランシスコ
	11月5日	[アメリカ] サンディエゴ
	11月6日	[メキシコ] エンセナダ
	11月8日	[メキシコ] グアダルーペ島
	11月9日	[メキシコ] サン・ベニト諸島 (11月10日まで)
	11月10日	[メキシコ] セドロス島
	11月13日	[メキシコ] サン・ルカス岬

	11 月 15 日	[メキシコ] バンデラス港ベナス (11 月 16 日まで)
	11 月 17 日	[メキシコ] チャメラ湾 (11 月 20 日まで)
	11 月 20 日	[メキシコ] テナカティタ湾
	11 月 21 日	[メキシコ] マンサニーヨ (11 月 22 日まで)
	11 月 24 日	[メキシコ] シワタネホ湾
	11 月 25 日	[メキシコ] アカブルコ (11 月 29 日まで)
	12 月 1 日	[メキシコ] プエルト・アンヘル
	12 月 2 日	[メキシコ] ポルト・グアトゥルコ (12 月 7 日まで)
	12 月 7 日	[メキシコ] サンタクルス湾 (12 月 8 日まで)
	12 月 8 日	[メキシコ] タンゴラ・タンゴラ (12 月 13 日まで)
	12 月 16 日	[エルサルバドル] ラ・リベルタード (12 月 19 日まで)
	12 月 20 日	[エルサルバドル] ラ・ウニオン (12 月 21 日まで)
	12 月 21 日	[エルサルバドル] メアングエラ島 (12 月 22 日まで)
	12 月 22 日	[エルサルバドル] ファラロン島
		[エルサルバドル] コンチャギータ島
		[エルサルバドル] ラ・ウニオン
	12 月 23 日	[ニカラグア] ポトシ河 (12 月 25 日まで)
	12 月 25 日	[ニカラグア] マネーペニー・ポイント
	12 月 28 日	[ニカラグア] コリント (1 月 7 日まで)
1938 年	1 月 9 日	[ニカラグア] サン・ファン・デル・スル (1 月 12 日まで)
	1 月 12 日	[コスタリカ] ポート・バーカー (1 月 23 日まで)
	1 月 23 日	[コスタリカ] ムルシエラゴ湾
		[コスタリカ] ポルテロ・グランデ (1 月 24 日まで)
	1 月 24 日	[コスタリカ] ポルト・クレブラ (1 月 31 日まで)
	1 月 31 日	[コスタリカ] ブラシリト湾 (2 月 1 日まで)
	2 月 1 日	[コスタリカ] ピエトロ・ブランカ湾 (2 月 6 日まで)
	2 月 11 日	[コスタリカ] プンタ・アレナス (2 月 12 日まで)
	2 月 12 日	[コスタリカ] セドロス島 (2 月 13 日まで)
	2 月 13 日	[コスタリカ] プンタ・アレナス (2 月 21 日まで)
	2 月 21 日	[コスタリカ] セドロス島 (2 月 22 日まで)
	2 月 22 日	[コスタリカ] ネグリータス島 (2 月 13 日まで)
		[コスタリカ] ジャスパー島 (2 月 25 日まで)
	2 月 25 日	[コスタリカ] バジェーナス湾 (2 月 26 日まで)
	2 月 28 日	[コスタリカ] プンタ・アレナス (3 月 1 日まで)
	3 月 2 日	[コスタリカ] ウヴィータ湾 (3 月 4 日まで)
	3 月 5 日	[コスタリカ] ドゥルセ湾ゴルフト (3 月 9 日まで)
	3 月 9 日	[コスタリカ] パヴォン湾 (3 月 10 日まで)
	3 月 11 日	[パナマ] プエルト・アルムエーリカス
		[パナマ] パリダ島 (3 月 13 日まで)

	3月13日	[パナマ] オンダ湾 (3月19日まで)
	3月19日	[パナマ] コイバ島エルモーサ湾 (3月20日まで)
	3月20日	[パナマ] ハンニバル・バンク
	3月22日	[パナマ] バルボア (3月24日まで)
	3月27日	[コロンビア] ゴルゴナ島 (4月2日まで)
	4月5日	[パナマ] バルボア

乗船者としては、クロッカー及び彼の友人であるモーリス・ウィロウズ、医者としてスタンフォード大学のエリック・リリジェンクランツ (Eric Lilijencrants) の名前が (Science 1938: 522), また船長のペダーセンの名前もあげられている (Beebe 1938a: 287)。研究スタッフの側としては、ニューヨーク動物協会の熱帯研究所から以前の探検と同じ4名が参加している。朝枝の名前は、写真家兼研究助手 (preparateur) として挙げられている (Beebe 1938a: 287; Science 1938: 522)。

興味深いのは朝枝の名前の挙げられ方である。ビーブの報告書では、アルフレッド・ペダーセン船長と並ぶクロッカーの船員のなかで「写真家兼研究助手」を担う人物として記載されている (Beebe 1938a: 287)。一方で『サイエンス』の方では、ニューヨーク動物協会のメンバーと並び研究のための要員として並記されている (Science 1938: 522)。彼はクロッカー側の船員であると同時に、ニューヨーク動物協会の活動とも関わる研究員としての中間的な位置づけに置かれていたわけである。

なお本探検は、朝枝が参加した最後のものとなった。第二次世界大戦がせまり物情騒然とするなか、クロッカーによる探検隊がこれ以降に組織されることはなかった。朝枝自身もクロッカー以外が組織した探検隊に加わることもなく、1942年になると当時の日系アメリカ人の多くがそうであったように敵性国人として収容所での生活を余儀なくされる。戦後、アメリカで市民権を得て、1968年に亡くなるまでサンフランシスコで生活を送った。いずれにせよ探検隊に参加しなくなったからの生涯は、探検隊の記録を精査するという本稿の射程から外れるため、別稿を期したい。



## 4 私的探検の系譜とハイブリッド

### 4.1 アメリカの私的探検のなかのグレイ及びクロッカー探検

本稿ではこれまで朝枝がアメリカにおいて参加した探検隊の資料を精査することで、各探検の輪郭を明確にし、それらのプロジェクトから産出された資料を読解するための枠組みを提示してきた。ここで考察する必要があるのは、そもそもこうした資料が1930年代のアメリカにおいていかなる位置づけにあるのか、別言すればこうした私的探検を系譜に位置づける作業である。

参考となるのは、ニューヨークのアメリカ自然史博物館の定期刊行物『ナチュラル・ヒストリー』である。1920年代から1930年代辺りにかけての同誌のインデックスをみると、「探検 (expedition)」の項目が立てられていることがわかる。同項目において取り上げられているのは、博物館や研究者による探検隊の例である。本稿で取り上げた探検についても、クロッカー探検のうちで同館が関わっていたものは立項されている (Natural History 1934: III; 1935: III)。リーダーであるクロッカーの名前で登録されているが、内容についての箇所では専門的な研究スタッフにふれている。またグレイの旅についても、本項が取り上げたものとは別のプロジェクトであるが、探検とは別に独立した項目として立てられている。ここでとりあげられている探検は、当時行われていた数多い探検のほんの一部であるにすぎないであろう。

このように広い意味でアメリカ自然史博物館がかかわった探検が取り上げられているが、個別の内容についてみると、公的な機関によるものから私的なプロジェクトのかたちをとったものまで多様な形態のものが含まれていることが分かる。朝枝が参加した探検もこうした1930年代のアメリカにおける収集の系譜に連なるものであったといえる。

さらに1930年代のアメリカにおける博物館やモノの収集という点に関していえば、かねてよりそのイデオロギー的側面を批判的に検討する研究がある。アメリカ自然史博物館の展示に関する科学史家ダナ・ハラウェイの論考は、セオドア・ルーズベルト大統領や剥製師カール・エイクリー (Carl Akeley) が展示を構築する上で果たした役割にふれながら、展示に潜むイデオロギーをあぶりだしている。

もとの論考では多様な論点を提出しているので、ここでは長谷によるその論点の整理を引用する。彼によるとハラウェイの展示分析は、「性と階級と人種を欠落させた（男性的に）理想化された自然にすぎないと批判し、その背景に二十世紀初頭のアメリカの優生学、男性中心主義（狩猟ゲーム）、帝国主義などの暴力的思想を読み取っている」（長谷 2008: 221-222）のである。また、展示が、自然、キャンプ、アウトドアライフに精を出す白人・プロテスタントの中・上流階級からの支持をえていたことをハラウェイは示唆している（Haraway 1984: 54）。

本稿では朝枝が残した記録を分析しているという理由から、ゼーン・グレイとテンプレートン・クロッカーの探検に注目してきたが、どちらもそうしたアメリカにおける博物学収集の時代精神のなかにおかれていることが本稿の記述からもみてとれよう。いずれも経済的に成功した個人によってなされた、博物学の領域と関わる営為であるという意味で共通している。前者が徹底的に個人によるプロジェクトであるのに対して、後者は個人をベースとしながらも他の博物館や研究機関とも連携しつつ探検を続けたという違いはあるが、いずれも20世紀初頭のアメリカにおける探検の系譜のなかに無理なく収めることができる。

本稿の対象である双方の探検の中心人物からも、似た思想的兆候を読み取ることにはできる。グレイが自然との格闘を通じて、いまだかつて捕獲されたことのない大きさの巨大魚を釣り上げることに熱意を注いでいたとすれば、クロッカーは未踏の地とされた場所に足を運び、モノの収集し、滞在の記録を作るという営為にいそしんだ。両者はともにスポーツマンとしても知られていたように、男性的主体による自然の征服、人類が達成したことの事業をなすという探検の精神が、いまだ現役の時代であったのだ<sup>31)</sup>。

## 4.2 探検隊というハイブリッド

系譜的は位置づけが1930年代のアメリカの博物学的営為に連なるとして、2節から3節までの記述から見えてくる各探検のまとまりのなさほどどのように理解できるだろうか。本稿が行ってきたように朝枝の参加した探検について首尾一貫した形で整理すると、そもそも探検の全体像を俯瞰した記録が残されていない所以も見えてくる。

まずあらためて指摘されるべきは、いずれも個人が自分の資金を拠出して、自

分の裁量で組織した私的探検隊であるという点である。そのため、参加した研究者は各自の目的に応じて研究成果をとりまとめているが、主宰者であるゼーン・グレイやテンプレートン・クロッカーは、そうした必要性を必ずしも感じていなかったと思われる。とくに科学的な探求に関心を抱いていたわけでは必ずしもない前者はいうまでもない。あくまで小説の題材をさぐり、執筆の英気を養うのが主たる目的であっただろう。後者のクロッカーの方はもう少し科学的事業への関心をもっていった可能性がある。実際、探検に着手する前に乗り出した世界周航については公刊しているし (Crocker 1933a)、カリフォルニア科学アカデミーには、探検の詳細について書かれた彼の未公開の草稿が大量に残されている。草稿は繰り返しタイプしなおした形跡があることから、クロッカー自身には何らかの記録を残そうとする意思があったことをうかがい知れる。ただし内容は、筆者が目にした範囲では、あくまで旅の記録であり、航海記にとどまるものであった。

もうひとつテンプレートン・クロッカー探検に全体としてまとまった記録がない理由は、探検隊の組織の問題である。クロッカーは船の所有者としてザカ号と船員を提供しているが、そこに参加する研究スタッフの所属母体はさまざまである。ザカ号を運転していた船員についての詳細は、最初の航海以外不明である。初回の探検の船長がロッチで、次回以降はペダーセンという以外の情報はない。サモア人のフランクとベサムは、さまざまな報告書の断片や朝枝の写真に顔を出しているので、おそらくそれなりの回数にわたり航海に同行しているのだろう。ただしすべてに参加していたかどうかはわからない。一方で研究スタッフは、プロジェクトの目的に応じて毎回変化するため入れ替わりが激しい。

このひとつの船に複数の研究スタッフの集団が併存している状況は経路にも反映されている。研究スタッフ側は、航海の途中における上下船が激しいのである。3.2 ハワイのビショップ博物館やスヴァの関係者、3.3 と 3.6 のアメリカ自然史博物館の関係者、3.5 と 3.7 のニューヨーク動物協会の関係者の場合は、調査目的に応じた経路にだけ乗船していた。実際彼ら研究スタッフは、ザカ号の乗船スタッフとは、同じ船とはいえ別の旅程をとっていたといえるのである。

さらには探検の目的もひとつではなかった。ひとつの探検隊に、さまざまな学術的目的を抱えた研究スタッフが併存している。これはひとつのプロジェクトがあり、各メンバーがそれぞれの仕事を組織的に分担しているという意味ではない。

ひとつの船のなかに、まったく別のプロジェクトを抱えた複数の集団が同行していたのである。学問分野の点だけみても、民族学、形質人類学から動物学まで文系理系の境界にとらわれない幅広い研究者が集っていた。さらに探検の事情を複雑にするのは、研究スタッフではなかったクロッカーは、目的地に向かう途中で適宜彼が関心をもった標本資料を収集していることである。

このようにみえてくると、むしろ探検隊全体としてプロジェクトがひとつにまとめられていないことの方が当然に見えてくる。そしてこうした探検隊の異種混交的な性質は、朝枝が参加したものに特有というわけではない。『探検の人類学』の序章においてバーネットを引用しつつ編者が述べるように、探検とは探検隊の構成と目的の双方においてそもそも「ハイブリッド」であるのだ (Hasinoff and Bell 2015: 5; cf., Burnett 2002: 6)。

むしろ本稿で取り上げた探検隊は、朝枝がたまたま記録していたがゆえにそれなりに見通しよくまとめられたとさえいえる。実際、クロッカーやあるいは彼の船であるザカ号が参加した探検は、本稿で取り上げたものに限らず他にも何件か行われている模様である (Davis n.d.)。しかしそれらの内容については、不明な点が多いのである。

## 5 さいごに

博物館資料の調査という時、最初に行われる基本的作業はコレクションの背景に関する伝記的調査であろう。こういった資料が誰によってどこで集められ、それがどのように博物館にもたらされたか。いわば収蔵されている資料が、研究される上で必要最低限の情報となるものである。筆者は、本稿で扱った国立民族学博物館の朝枝利男コレクションに対してそうした基礎的情報を付加するために調査をはじめた。しかしそうした作業を通じて見えてきたのは、一元的にまとめがたいという資料の性格であり、ひいてはそれらが生み出されたアメリカの1930年代にみられた私的探検の系譜に連なる特徴と探検によって残された資料のハイブリットさであった。

同時に私的探検に関わる資料がこれまで積極的な活用が難しかった理由も明確となった。つきつめると科学的調査の手法と手続きが現在のパラダイムと異なっ

ているため、いまではそこで集められた標本資料も扱いづらくなっている側面があるわけだ。さらには探検に付随するハイブリットさのため、参加した研究スタッフ各自の関心に応じた研究成果は産出されながらも、探検隊全体としての成果は見通しがつきにくいのである。もし既存のコレクションに対する伝記的調査というものがコレクションの総体としてのアイデンティティを解明する方向性に向かうのであれば、調査方法で私的探検に関わる資料を取り扱うことは容易ではない。むしろ本研究を通じてみえてくるのは、探検記録の場合はそれらのハイブリットさを念頭において、資料の性質を一元的にとりまとめるのではなく、そこに含まれる多元的な方向性を認めつつ資料それ自体に潜在的、顕在的に備わる可能性を引き出す研究アプローチの必要性ではなかろうか。

本稿が試みてきたのは、そうした作業の第一歩であり、各探検の期間、経路、目的をできるだけ明瞭な形で整理して、各探検の結果得られた資料の歴史的背景を明らかにすることを通じて、いまでは埋もれた私的探検に関わる資料をより有効に活用するための基盤を作ることであった。さらには本稿自体が執筆可能となった資料を残した朝枝利男が、それぞれの探検のあちこちに顔を出す活躍ぶりを見ていただければと思う。

## 謝 辞

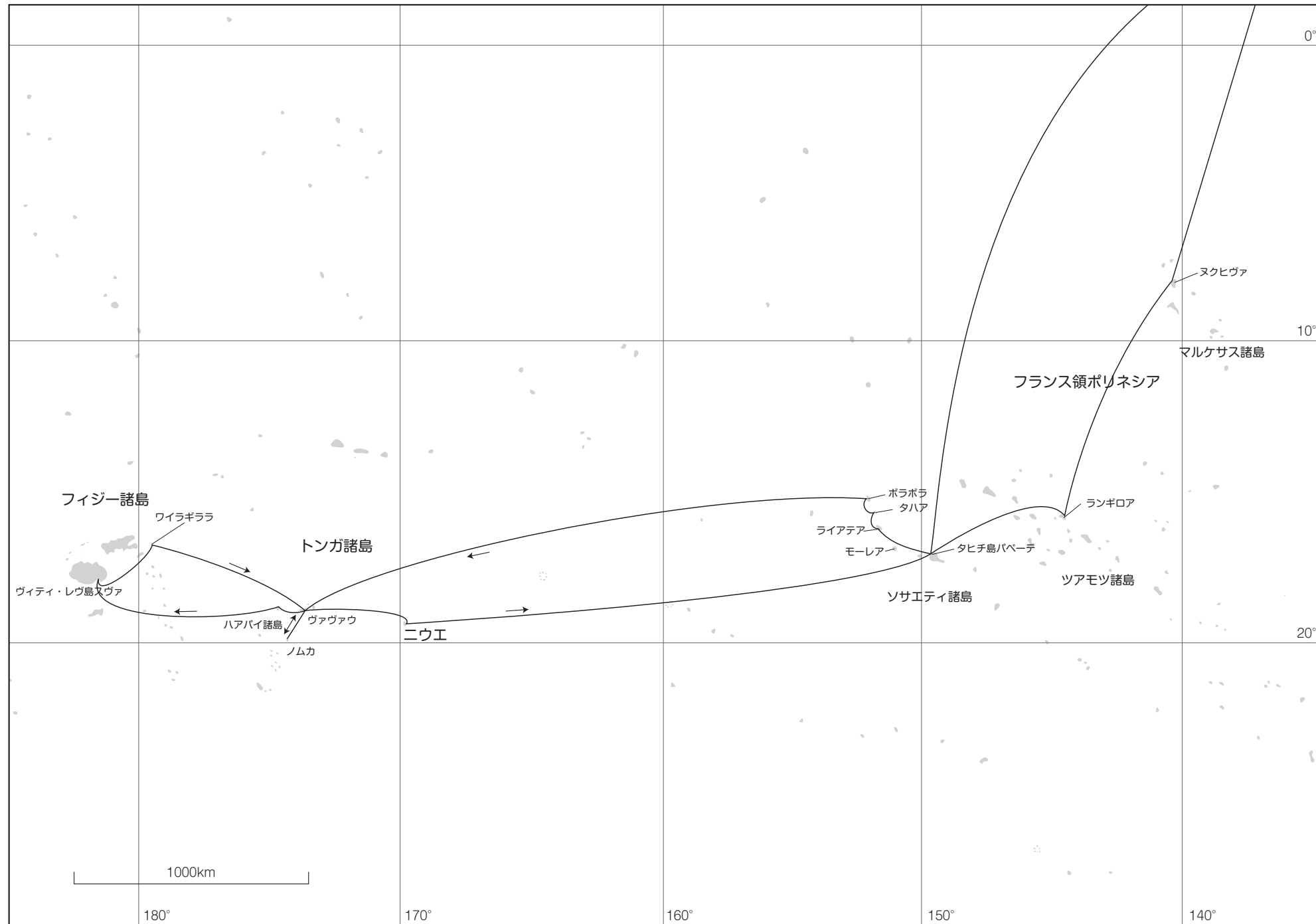
本稿は筆者の国立民族学博物館におけるフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築—オセアニア資料を中心に」を進めるなかで執筆されたものである。同プロジェクトの共同研究員である山口徹氏（慶応大学）、桑原牧子氏（金城大学）、石森大知氏（神戸大学）、倉田誠氏（東京医科大学）からはプロジェクトの研究会を通じて直接間接に有益な知見を提供していただいた。同僚のピーター・マシウス氏は発見の喜びを共有することでプロジェクト推進の原動力をいただいている。国立民族学博物館の図書室には資料収集の過程で、ケンブリッジ大学考古学人類学博物館のルーシー・カロー氏、カリフォルニア科学アカデミーのセス・コットレル氏、ジョン・マコスカー氏の各氏には、調査の過程でお世話になった。アメリカ大陸の地名のカタカナ表記について八木百合子氏（国立民族学博物館）の助力を、大川真由子氏（神奈川大学）には草稿へのコメントを頂きました。また本稿のもととなるデータの一部を得るにあたり、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築—オセアニア資料を中心に」の経費を活用しております。記して感謝いたします。

## 注

- 1) ただし本稿は朝枝利男の伝記を意図してはいない。あくまで探検関連の資料の精査が主たる目的であり、それにあわせて同資料に残された朝枝の姿を復元する趣旨である。朝枝本人が残した探検の成果としての文章や彼のアメリカ移住前及び探検後の伝記については、別途検討すべき資料があるため別稿で扱いたい。
- 2) ブリガム・ヤング大学のハロルド・リー図書館には、ゼーン・グレイ・ペーパーが収蔵されている。写真も保存されているので、朝枝と関係した写真が残されている可能性はあるが、本稿執筆時点で検索をかけた限りでは関連資料は見つかっていない。
- 3) 国立民族学博物館所属の朝枝利男のアルバム『No.16 South Seas. Part I Tahiti. Dec. 24 1930–Apr. 3 1931』に記載された情報による。
- 4) 乗船メンバーについては、国立民族学博物館所蔵の朝枝利男のアルバムに記載されている（『No.16 South Seas. Part I Tahiti. Dec. 24 1930–Apr. 3 1931』）。
- 5) 国立民族学博物館所蔵の朝枝利男の当該部分の日記（タイトル未記載）をもとに作成。
- 6) 国立民族学博物館朝枝利男コレクションの写真（番号：X0075552）を参照のこと。
- 7) アメリカ自然史博物館所蔵の1930年6月に撮影された写真による。AMNH Negative Logbook 18のイメージ番号 313266。
- 8) 本稿に登場する関係する地名は基本的に現在の名称でそろえてある。
- 9) ただし乗船スタッフは、以下の航海の乗船者と重複が見られる。
- 10) 国立民族学博物館所蔵の朝枝利男のアルバム（『Templeton Crocker's Galapagos Is. and Central American Coast. Vol. 1 California Academy of Sciences Scientific Expedition Mar. 2–Sept. 1, 1932.』）では、3月2日出港となっている。理由は判然としないが、ここでは報告書の記載に準じておく。また本探検に関する地図は、クロッカーの報告書にもみつかると（Crocker 1933b: plate 1）。
- 11) 国立民族学博物館所蔵の朝枝利男の日記（『加州アカデミー、オブ、サイエンス、クロッカー氏 南米ガラパゴス学術探見記 一九三二年三月–八月』）をもとに作成。なお、ロッチ船長の手による朝枝日記より詳細な旅程がクロッカーの論考に付記として掲載されている（Crocker 1933b: 8–9）。なおクロッカー山の登頂日は朝枝利男の日記に準じて5月9日としてある。公式に認められた登頂日は、5月10日の可能性がある（カリフォルニア科学アカデミー所蔵 Crocker (C. Templeton) Papers の oversize #27 内の miscellaneous I 所収のエクアドル総領事代理によって出された1932年10月31日付の文書を参照のこと）。
- 12) モーリス・ウィロウズはクロッカー探検隊のなかで昆虫収集を担当とするメンバーとして言及されるが、研究スタッフに分類されていないのには理由がある。彼は学術研究の経歴を経た人物ではなく、探検隊に参加する前には俳優を生業としていた。クロッカーの友人として探検隊に参加するために、昆虫の収集を学んだというのが正確なところである。秘書とも記載されているがクロッカーが船中で書いていた航海記をタイプし編集する仕事を任せられていたからであろう（Vreeland 2010: 275）。なお、クロッカーにとっても特別な友人だったようで、航海中鬱になりアルコールにおぼれがちであったクロッカーも、彼と一緒にいるときは平静を保っていたとの証言がある（Gould 2004: 339）。
- 13) クロッカーの文中では、Pemassa Utu とされている（Crocker 1933b: 7）。本稿ではビーブの名前表記を採用した（Beebe 1938b）。
- 14) *asaedai* の表記は引用先の資料に準じている。
- 15) ランバートは、朝枝が病気になったためトゥラギに向かったと証言している（Lambert 1941: 344）。こちらも理由であった可能性がある。
- 16) 国立民族学博物館所蔵の朝枝利男の日記（『ザカ號第二回南洋学術探見旅行日誌一九三三』）をもとに作成。
- 17) メンバーの名前の誤記や表記ゆれはよくみられる。『サイエンス』においてマラカイは Malachai と誤記（Science 1934: 344）、ランバートの著作でノートンは Norton Stuart と朝枝利男は Toschio Aseida と誤記されている（Lambert 1941: 315–316）。
- 18) スケッチの現物は、ケンブリッジ大学考古学人類学博物館（資料番号：OA2/15/14, OA2/15/7）、及びビショップ博物館の図書館（paki 3 hall map case 2.4, canoes）で確認できる。なお両博物館には朝枝利男作成とされる刺青のスケッチも収蔵されている。それぞれ資料番号（OA1/2/10）と（paki 3 hall map case 2.4, Anuda, Rennel, Bellona）を参照のこと。ただし近年ケンブリッジの側の資料の一部は紹介されているが（Carreau 2016: 56–57）、刺青関係の資

料が同時代的に研究の素材とされた形跡はない。

- 19) 国立民族学博物館所蔵の朝枝利男の日記（『ザカ號第三回南洋学術探見旅行日誌 一九三四-三五』）をもとに作成。
- 20) シャピロのピトケアンにおける調査は、この島に関する古典的研究となっている（Shapiro 1936）。ただしクロッカーと同僚については謝辞で言及されるのみで、それほど前面にでていない。朝枝の名前は出てこない。
- 21) カリフォルニア科学アカデミー所蔵のクロッカー関連資料、Crocker C. T. の Oversize #17 に所収のアルバム参照。
- 22) 同上のインデックス参照。
- 23) ビーブの論考（Beebe 1937: 35）に掲載された旅程をもとに作成。なおこの探検以降の朝枝の日記は存在しているのか不明である。
- 24) 国立民族学博物館朝枝利男コレクションには、ビーブから朝枝に寄贈された書籍が残されている。『アークトゥルススの冒険（The Arcturus Adventure）』であり、そこには 1936 年 6 月 4 日の日付とともに「トシオ・アサエダへ。もっともすぐれた芸術家、写真家、剥製師、製図家、などなど」とメッセージが付されている。また同コレクションのなかには、おそらく朝枝の自宅内で撮影されたとおぼしき写真がある。その写真には、同著作がテーブルに一冊置かれているのが見える（番号：X0081546）。
- 25) 別の論考では、若干異なる説明が付されている（Ward 1939: 1）。
- 26) 国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの朝枝利男作成のアルバム（『Crocker American Museum Expedition Aug 1936-Jan 1937』）をもとに作成。アルバムでは滞在期間が必ずしも明確に記載されていない。日時の記載に当たり新聞記事で確認できたものはそれで補った（日布時事 1936a: 3; 1936b: 3）。
- 27) 別の原稿には現地住民の名前も残されている。タウ（Tau）とトニ（Toni）というトンガレヴァ人である（Miner 1938b: 47; 1941: 254）。
- 28) カリフォルニア科学アカデミーで刊行されている『サイエンス』では、出発に日時を 11 月 6 日と記載している（Science 1938: 522）。同アカデミーのクロッカーペーパーのインデックスでは、1937 年 11 月 2 日から 1938 年 4 月までとなっている（Davis n.d.）。
- 29) 国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションのアルバム（『Crocker Beebe Expedition: Central American Coast Nov. 1 1937-May 5 1938』）を参照のこと。
- 30) ビーブの論考（Beebe 1938a: 288）に掲載された旅程をもとに作成。
- 31) ただしグレイと異なりクロッカーの私生活には不明な点が多い。ここで述べているのはいま明らかになっている資料からいえる範囲という限界があることを付言しておく。



地図1 ゼーン・グレイとの旅行の航路  
(国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの資料(番号:X0075763)及び朝枝利男の日記をもとに作成)

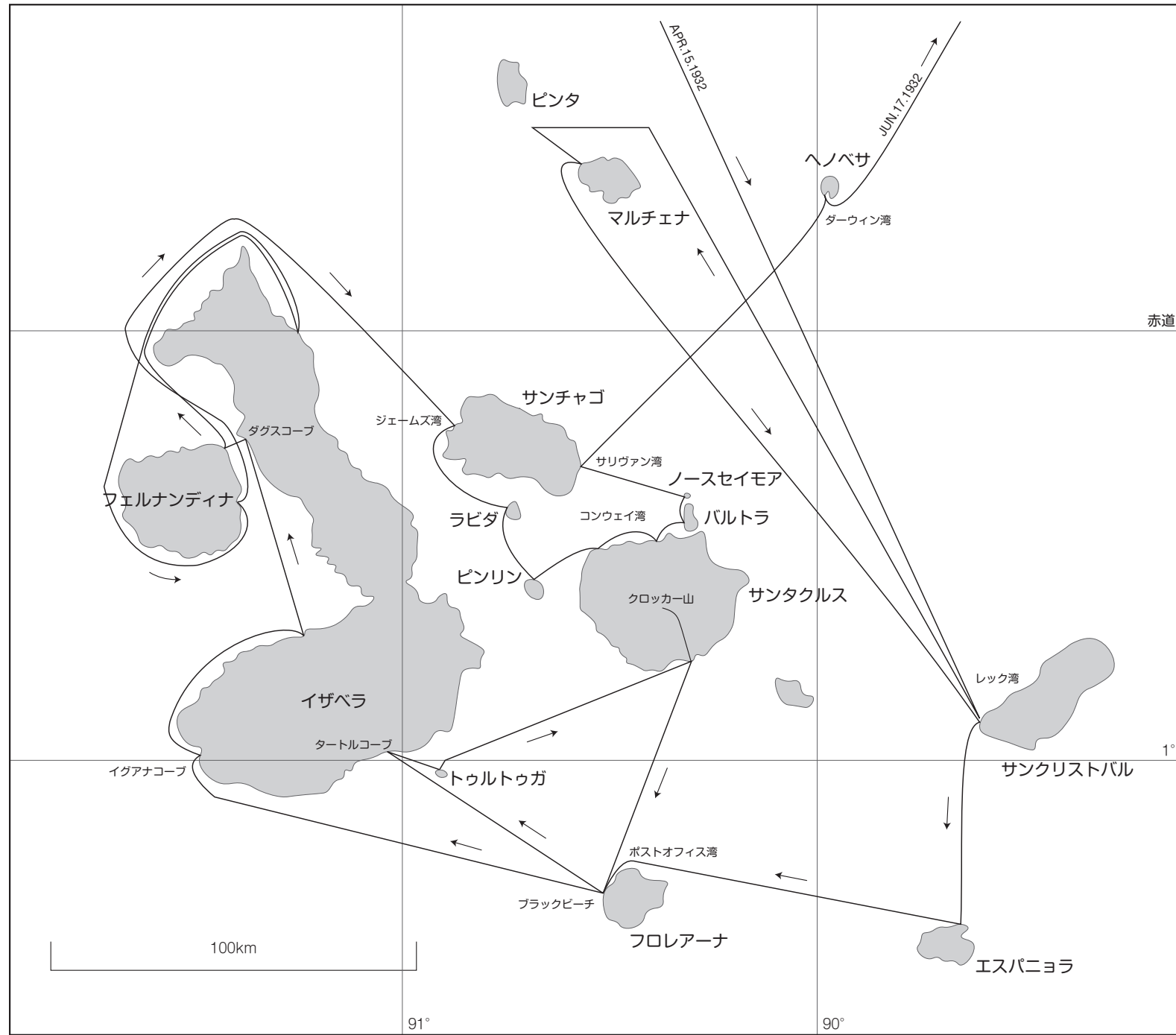






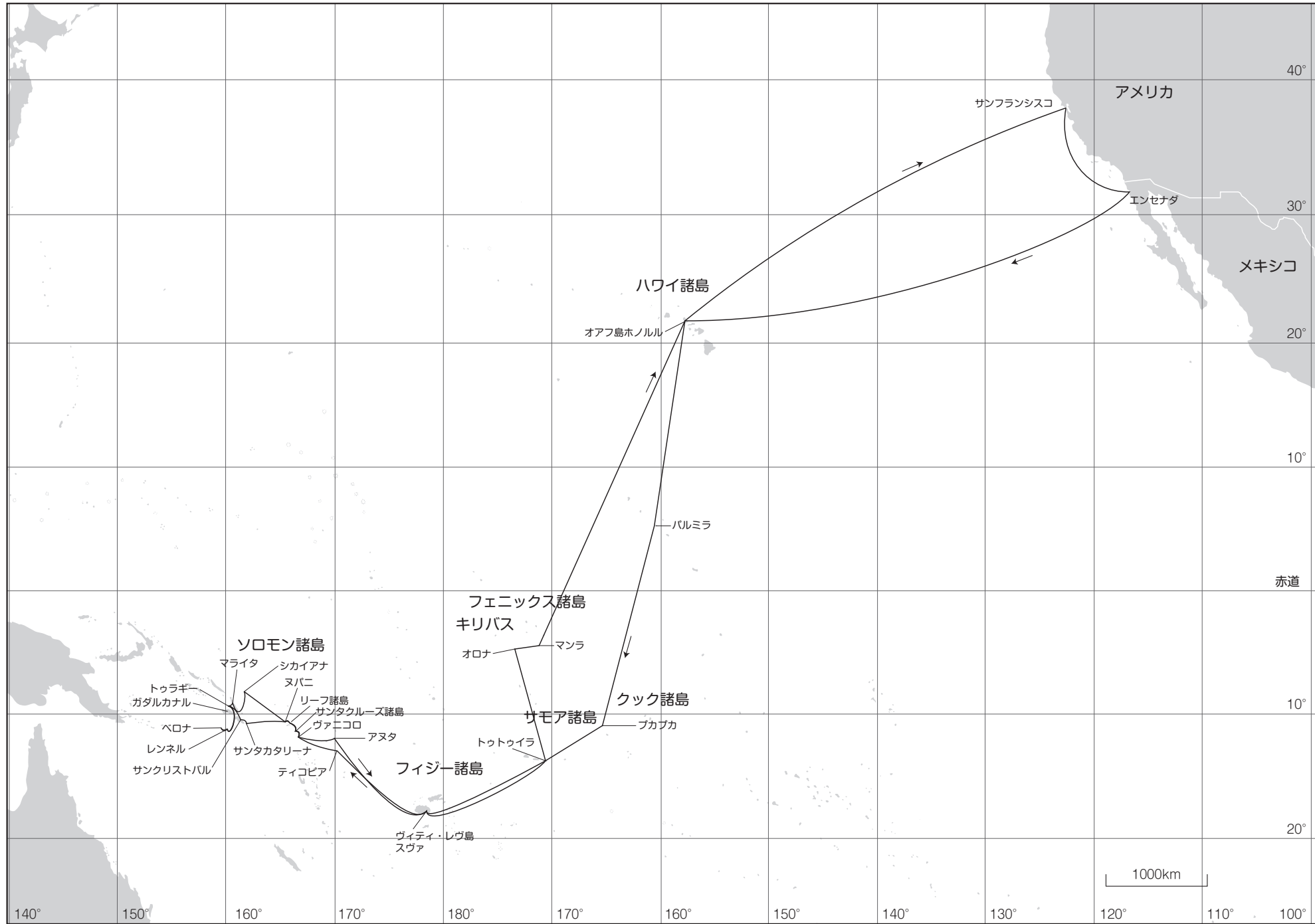
地図2 カリフォルニア科学アカデミーのテンブルトン・クロッカー探検の航路  
(国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの資料(番号: X0075966)をもとに作成。  
同様な地図は、別の箇所にも記載されている(Crocker 1933b: plate 1))





地図3 ガラパゴスにおける詳細な航路  
(国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの資料(番号:X0076014)をもとに作成)





地図4 ソロモン諸島へのテンブルトン・クロッカー探検の航路  
(国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの資料(番号:X0076522)をもとに作成)





**地図5** 東ポリネシアへのアメリカ自然史博物館のテンプレトン・クロッカー探検の航路  
 (国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの資料(番号:X0077362)をもとに作成。  
 同じような地図は、別の箇所にも掲載されている (Chapin 1936a: 289; 1936b: 34))

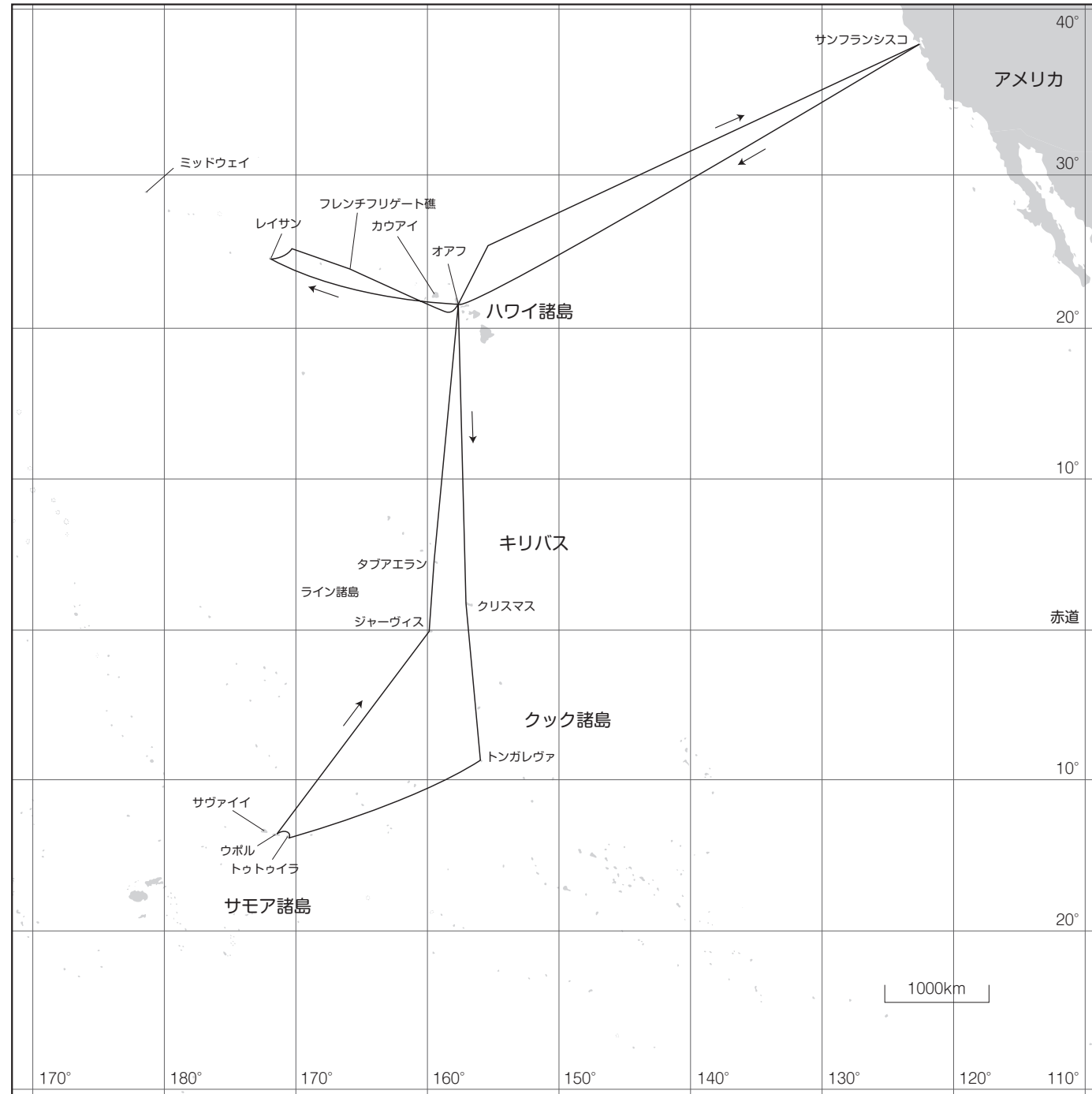






地図6 ニューヨーク動物協会のテンブルトン・クロッカー探検の航路  
(国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの資料(番号:X0078634)をもとに作成。ニューヨーク動物協会が作成した同じような地図も存在しており(Beebe 1936: 234; 1937: 36), ビープの本にも再録されている(Beebe 1938b))





地図7 サモアとハワイ諸島へのアメリカ自然史博物館のテンブルトン・クロッカー探検の航路  
(国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの資料(番号:X0080511)をもとに作成)





地図8 ニューヨーク動物協会の東太平洋探検の航路  
(国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションの資料(番号:X0078823)をもとに作成。この探検に関する地図についてはビーブの論考でも目にする事ができる (Beebe 1938c: 148))



## 参考文献

### 〈日本語〉

- 伊藤秀三  
1983 『新版 ガラパゴス諸島——「進化論」のふるさと』東京：中央公論社。
- 田中雅一  
2011 「探検と共同研究——京都大学を中心とする文化人類学」山路勝彦編『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』pp. 575–609, 西宮：関西大学学術出版会。
- トレハン, J.  
1991 『ガラパゴスの怪奇な事件』東京：晶文社。
- 日布時事  
1933 「朝枝利男氏の南米体験談」『日布時事』3月23日：3。  
1936a 「南洋科学探検船ザカ號 けさ入港」『日布時事』8月31日：3。  
1936b 「南洋探検を終りザカ號帰港」『日布時事』11月12日：3。
- 日米新聞  
1935 「朝枝利男氏魚類採集に低加州に向ふ」『日米新聞』11月6日：3。
- 長谷正人  
2008 「ジオラマ化する世界」青弓社編集部編『写真空間1 特集「写真家」とは誰か』pp. 215–224, 東京：青弓社。
- 山口徹  
2019 「朝枝写真コレクション——北部クック諸島プカプカ環礁」フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト『民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築』研究会、国立民族学博物館、2019年6月22日開催。

### 〈外国語〉

- Allen, W. E.  
1938 The Templeton Crocker Expedition to the Gulf of California in 1935: The Phytoplankton. *Transactions of the American Microscopical Society* 57(4): 328–335.
- Anderson, W.  
2012 Hybridity, Race, and Science: The Voyage of the Zaca, 1934–1935. *Isis* 103(2): 229–253.
- Bailey, A. M.  
1953 *Laysan and Black-footed Albatrosses: Museum Pictorial 6*. Denver, Colorado: Denver Museum of Natural History.
- Beaglehole, E.  
1944 *Islands of Danger*. Wellington: Progressive Publishing Society.
- Beaglehole, E. and P. Beaglehole  
1971[1938] *Ethnology of Pukapuka*. New York: Kraus Reprint. (Reprint, originally published: Honolulu, Hawaii: Bernice P. Bishop Museum)
- Beebe, W.  
1926 *The Arcturus Adventure: An Account of the New York Zoological Society's First Oceanographic Expedition*. New York: Putnam.  
1936 On the World's Greatest Fishing Grounds. *Bulletin: New York Zoological Society* 39(6): 232–242.  
1937 The Templeton Crocker Expedition. II: Introduction, Itinerary, List of Stations, Nets and Dredges. *Zoologica* 22(1): 33–46.  
1938a Eastern Pacific Expeditions of the New York Zoological Society, XIV. : Introduction, Itinerary, List of Stations, Nets and Dredges of the Eastern Pacific Zaca Expedition, 1937–1938. *Zoologica* 23(14): 287–298.  
1938b *Zaca Venture*. London: John Lane The Bodley Head.  
1938c Forty Bays: Along the West Coast of Central America the Department of Tropical Research



- again has Dipped its Nets. *Bulletin: New York Zoological Society* 41(5): 147–156.
- 1942 *Book of Bays*. New York: Harcourt.
- Beebe, W. and J. Tee-Van  
 1938 Eastern Pacific Expeditions of the New York Zoological Society, XV: Seven New Marine Fishes from Lower California. *Zoologica* 23(15): 299–312.
- Burnett, D. G.  
 2002 “It Is Impossible to Make a Step without the Indians” : Nineteenth-Century Geographical Exploration and the Amerindians of British Guiana. *Ethnohistory* 49(1): 3–40.
- Bustos, Y.  
 2009 *Expedition of the California Academy of Sciences to Mexico and the Galapagos*. <https://www.calacademy.org/blogs/fromthestacks/1932templetoncrockerexpeditionofthecaliforniaacademyofsciencesto> (2016年12月28日閲覧)
- Carreau, L.  
 2016 *Collections from the Solomon Islands*. Cambridge: Museum of Archaeology and Anthropology, University of Cambridge.  
 2018 Made to Measure: Photographs from the Templeton Crocker Expedition. In L. Carreau, A. Clark, A. Jelinek, E. Lilje, and N. Thomas (eds.) *Pacific Presences: Oceanic Art and European Museums*, vol. 2, pp. 139–153. Leiden: Sidestone Press.
- Chapin, J. P.  
 1935a The Templeton Crocker Pacific Expedition. *The Scientific Monthly* 41(3): 281–285.  
 1935b To Polynesia on the Yacht “Zaca”. *Natural History* 36(4): 293–310.  
 1936a Through Southern Polynesia. *Natural History* 37(4): 287–308.  
 1936b Islands West of South America. *Natural History* 38(1): 31–55.
- Clark, H. W.  
 1936 The Templeton Crocker Expedition of the California Academy of Sciences, 1932 No. 29 New and Noteworthy Fishes. *Proceedings of the California Academy of Sciences*, Fourth Series 21(29): 383–396.
- Crocker, T.  
 1933a *The Cruise of the Zaca*. New York and London: Harper & Brothers.  
 1933b The Templeton Crocker Expedition of the California Academy of Sciences, 1932 No. 2 Introductory Statement. *Proceedings of the California Academy of Sciences. Fourth Series* 21(1): 3–9.  
 1957 Templeton Crocker’s Letter to Howell. *Leaflets of Western Botany* 8(8): 187.
- Davis, M. T.  
 n.d. Inventory to the Papers of C. Templeton Crocker at the California Academy of Sciences. <http://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/kt0199r4z4> (2017年1月31日閲覧)
- Ely, C. A. and R. B. Clapp  
 1973 *The Natural History of Laysan Island, Northwestern Hawaiian Islands*. Atoll Research Bulletin No. 171, Washington DC: The Smithsonian Institution.
- Emory, K. P.  
 1971 [1939] *Archaeology of Mangareva and Neighboring Atolls*. New York: Kraus Reprint. (Reprint, originally published: Honolulu, Hawaii: Bernice P. Bishop Museum)
- Field Museum News  
 1934 Pacific Ethnology Exhibit is Augmented. *Field Museum News* 5(7): 3.
- Geismar, H.  
 2006 Malakula: A Photographic Collection. *Comparative Studies in Society and History* 48(3): 520–563.
- Gould, C. G.  
 2004 *The Remarkable Life of William Beebe: Explorer and Naturalist*. Washington DC: Island Press/Shearwater Books
- Grady, R. F.  
 1942 Book of Bays by William Beebe. Harcourt, Brace and Co. \$3.50. *America: Catholic Review of the Week*. April 11: 22–23.

- Grey, Z.  
1928 Big Game Fishing in New Zealand Seas: Fisherman's Account of Fishing Cruise. *Natural History* 28(1): 46–52.  
1932 Dolphin at Tahiti: Capturing a Prize Specimen of the Most Colorful of Sea Fishes. *Natural History* 32(3): 300–302.
- Grunsky, C. E.  
1933 The Templeton Crocker Expedition of the California Academy of Sciences, 1932 No. 1 Foreword. *Proceedings of the California Academy of Sciences*. Fourth Series 21(1): 1–2.
- Haddon, A. C. and J. Hornell  
1975[1936, 1937, 1938] *Canoes of Oceania*. New York: Kraus Reprint. (Reprint. Originally published: Honolulu, Hawaii: Bernice P. Bishop Museum)
- Hanna, G. D.  
1932 The Templeton Crocker Expedition of the California Academy of Sciences. *Science, New Series* 76(1974): 375–377.
- Haraway, D.  
1984 Teddy Bear Patriarchy: Taxidermy in the Garden of Eden, New York City, 1908–1936. *Social Text* 11: 20–64.
- Hasinoff, E. L. and J. A. Bell  
2015 Introduction: The Anthropology of Expeditions. In J. A. Bell and E. L. Hasinoff (eds.) *The Anthropology of Expeditions: Travel, Visualities, Afterlives*, pp. 1–32. New York: Bard Graduate Center.
- Hawaii Hochi  
1933 Science Meet to Hear Talk on Galapagos. *Hawaii Hochi*. March 24: 2.
- Hertlein, L. G. and A. M. Strong  
1951 Eastern Pacific Expeditions of the New York Zoological Society. XLIII Mollusks from the West Coast of Mexico and Central America. Part X. *Zoologica: Scientific Contributions of the New York Zoological Society* 36(2): 67–120.
- The Japanese American News  
1935 Expedition: Toshio Asaeda joins Crocker's Party. *The Japanese American News*. November 6: E1.
- Journal of the Polynesian Society  
1933 Personal Notes. *Journal of the Polynesian Society* 42(166): 130–131.
- Kant, C. C. (ed.)  
2008 *Dolly & Zane Grey: Letters from a Marriage*. Reno: University of Nevada Press.
- Lambert, S. M.  
1941 *A Yankee Doctor in Paradise*. Boston: Little, Brown.
- La Monte, Francesca  
1928 The Zane Grey Game Fish Collection. *Natural History* 28: 93–97.
- MacGregor, G.  
1934 Anthropological Work of the Templeton Crocker Expedition, 1933. In H. E. Gregory (ed) *Report of the Director for 1933*, pp. 38–43. Honolulu, Hawaii: Bernice P. Bishop Museum.  
1935 *Notes on the Ethnology of Pukapuka*. Honolulu, Hawaii: Bernice P. Bishop Museum.
- May, S. J.  
2000 *Maverick Heart: The Further Adventures of Zane Grey*. Athens: Ohio University Press.
- Miner, R. W.  
1938a On the Bottom of a South Sea Peal Lagoon. *National Geographic* 74: 365–390.  
1938b Doctor Roy Waldo Miner, American Museum of Natural History. *On the Bottom of a South Sea Peal Lagoon. Transactions of New York Academy of Sciences* 2(1): 44–48.  
1941 Pearl Divers. *Natural History* 47(5): 251–264.
- Moore, C.  
2019 *Tulagi: Pacific Outpost of British Empire*. Acton, Australian Capital Territory: ANU Press.
- The Museum News  
1934 Field Work. *The Museum News* 12: 3.

Natural History

1934 Index to Volume XXXIV. *Natural History* 34: Ⅲ .

1935 Index to Volume XXXV. *Natural History* 35: Ⅲ .

Orser, S.

1983 Members' Notebook: Bringing Back an Underwater Fairyland. *Rotunda* 7(2): 5.

Palmer, T. S.

1933 The Fiftieth Stated Meeting of the American Ornithologists' Union, October 17–20. *The Auk* 50(1): 64–79.

Pauly, T. H.

2007 *Zane Grey: His Life, His Adventures, His Women*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.

Perkins, H. C.

1963 Redescription and Second Known Record of the Bothid Fish, *Monoleneasaedai* Clark. *Copeia* 1963(2): 292–295.

San Bernardino Daily Sun

1935 Expedition Sails to Obtain Rare Fish. *San Bernardino Daily Sun*. November 6: 17.

San Pedro News Pilot

1931 Grey is back from S. Seas: Noted Author Brings Rare Fish, Plans Another Cruise Next Year. *San Pedro News Pilot* July 13: 2.

Science (New Series)

1932 California Academy of Sciences Expedition to Revillagigedo Archipelago. *Science, New Series* 75(1944): 352–353.

1934 The Templeton Crocker Expedition to the Solomon Islands. *Science, New Series* 79(2050): 344–345.

1936 The Crocker Expedition of the American Museum of Natural History. *Science, New Series* 84(2175) : 220–221.

1938 The Second Eastern Pacific Zaca Expedition of the New York Zoological Society. *Science, New Series* 87(2267): 522–523.

1941 The Pearl Divers Group in the American Museum of Natural History. *Science, New Series* 93(2424): 560–561.

Science News Letter

1936 Cast of Easter Island Head Placed in American Museum. *Science News Letter* 29(774): 83.

Seale, A.

1935 The Templeton Crocker Expedition of the California Academy of Sciences, 1933 No. 27 Fishes. *Proceedings of the California Academy of Sciences*, Fourth Series 21(27): 337–378.

Shapiro, H. L.

1935 Mystery Island of the Pacific. *Natural History* 35: 365–378.

1936 *The Heritage of the Bounty: The Story of Pitcairn through Six Generations*. New York: Simon & Schuster.

Slevin, J. R.

1959 *The Galapagos Islands: A History of Their Exploration*. San Francisco: California Academy of Sciences.

Thomas, N.

1996 *Out of Time: History and Evolution in Anthropological Discourse*. 2nd ed. Ann Arbor: University of Michigan Press.

Takahashi, T.

1943 Personality Sketch: Toshio Asaeda. *Topaz Times*. August 5: 2.

Vreeland, P. (ed.)

2010 *The Baha'i World: In Memoriam 1992–1997*. Baha'i World Centre.

Ward, M.

1939 The Brachyura of the Second Templeton Crocker: American Museum Expedition to the Pacific Ocean. *American Museum Novitates* 1049: 1–15.